AngelBeats!=Another=

黒一色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＡｎｇｅｌＢｅａｔｓ！＝Ａｎｏｔｈｅｒ＝

【Ｎコード】
Ｎ０９４６Ｍ

【作者名】
黒一色

【あらすじ】
突然やってきた死　死なない世界　魂の無い人間　生徒会長の天使
そして死んだ世界戦線

何か大切な事を忘れている少年　九頭木　龍之介

暗い過去を背負いながらも明るく笑う少女　葉月　姫香

二人がこの世界で何を探し見つけだすことが出来るのか？

Episode:1 Hello heaven's world?

「……いっ…痛ぇ…」
俺は仰向けになりながら腹部から伝わる激痛…
痛いとしか表現できない腹をいきなり刺された俺…刺された所から
生暖かい液体が出てるのがわかる「あー…死ぬのかな俺」
そう呟いた後ゆっくり瞼が落ちてるのがわかった
……

（あれ！？痛くない）さっきまであった痛みがすっかり無くなって
いた（あー死んだな俺…楽しい１８年間だったぜ…）

「ねぇ…君…」とても綺麗な声にハッと目を覚ました
目の前にはとても綺麗な白髪　どこか幼さが残っている顔立ちそん
な可愛い少女が道端で倒れている俺を見ていた

俺は体を起こし周りを見回した…

「……ッ！？」俺は驚いた　さっきまで俺は地元の商店街にいた
今いるのは見知らぬ（たぶん）学校だ
つーかいつの間にか着ている制服が変わってる

いろんな事がありすぎて頭が着いていけない

「ねぇ…」
また聞こえた綺麗な声の方に俺は振り向くと白髪の少女が無表情で
こっちを見ていた…
俺の脳内に命令が走った（逃げろ！こいつから逃げろ！）
俺はすぐに立ち上がりその場から逃げ出した…

「クソッ！何なんだよこれは」
俺は愚痴をこぼしながら走る……俺は今、逃げている
何からと言うてあのまるで人形のように表情が変わらない不気味な少女からだ…

そして今その少女は俺のすぐ後ろにいる

（嘘だろ！？俺、結構足速い方なのに…）
もちろん手を抜いてるつもりはない全力疾走だ！！
しかも俺はゼェゼェと息を切らしながら走ってるのに奴は息切れなんかしていないまるで歩いているかのように涼しい顔でいる…

（どうにかしないと他に人はいないのかよ？）

時間はわからないが空の色から午前ぐらいだろうもしここが学校なら今は授業中だろう

さっきいたグラウンドから雑木林を抜け渡り廊下が見えた…
（…！？…あれは）
人だ！…制服は俺のと違いブレザーを着た二人の青年
青髪とうっすら赤色が入った茶髪がいた
（しめたあいつ等なら…）「おーーいそこの二人…ちょい助けてくれ～」

二人はきずいた俺を見るなり逃げ出した。二人共だ…

「チョッ！？なんで逃げるんだよ？」
逃げる二人に問うと青髪が
「そりゃお前の後ろにいる奴から逃げてんだよどうにかしてまけよ

ー！」
（仕方がない）
俺は止まり彼女の方を向き
「すまん！トイレに行きたいんだ！だからついてこないでくれ！」
「…トイレはあっちよ…」彼女は走ってきた方向の逆を指差しスタスタと歩き去っていった…
（良かった～）
俺は肩の荷を降ろした
するとあの二人が俺に近づき
「いや～まけてよかっぜ」「大丈夫か？」
青髪がへらへらしているが茶髪は俺を心配してくれた

「オイ日向…天使から逃げてたってことは…」
「あぁ多分そうだぜ音無…オイお前ちょっと一緒にきてもらうぜ」

「…えっ！？どこに…？」
俺の問いに日向と呼ばれた青髪はニッコリしながら言った
「死んだ世界戦線本部にな！」

Episode:1 Hello heaven's world?（後書き）

どうでしたか？
初心者なので見苦しい所があったかもしれません。
話は原作沿いですが所々オリジナルストーリーをいれたいと思います。

感想など待ってます。

Episode:1 Hello heaven's world?

俺は日向と音無の二人に連れられ…
「ここって…校長室じゃん」
ドアノブに手をかけようとすると日向が俺を後ろに下げるなりドアの前に立ち
「開けッ！！ゴマッ！！」↑なんじゃそら
日向はドアを開けようとすると
「ハァー！？合い言葉って「落ち着け音無、実は合い言葉で開くんじゃくて声紋認識なんだよ。」
音無はどうやら騙されていたようだ
「なぁ何も言わず開けようとするとどうなるんだ？」
「試してみるか」
答えた日向の顔には笑みがこぼれていた
「いや…遠慮しとく」
日向がドアを開け
「おーいゆりっぺ！入隊希望者連れてきたぞ～」　（一言も入りたいなんて言って無いんだが）
目の前にある高級そうな椅子に偉そうに座っている紫色のロングヘアーの女がいた
「あら！奇遇ねぇこっちも入隊希望者を連れてきたとこなの」
部屋の中にはいろんな奴がいた

槍みたいな物持った者
踊っている者

「浅はかなり」と影で言う者

喋る度に眼鏡をかける者
がたいがいい者

特に特徴がない者

そして俺と同じ入隊希望者であろうおっとりとした者

なんか後悔してきたぞ…
この戦線の主旨やこの世界について説明して貰った

ここには死んだものが来るらしい

この世界にはNPC（ノンプレイヤーキャラクター）と言う形だけの人がいるそれらと普通に生活すると消滅してしまうらしい
天使（さっき追いかけて来た奴）とも一緒に学校生活してもらしい

そして戦線のみんなは天使を倒しこの世界を乗っ取るらしい

「所であなた達名前は？」（あっ…まだ自己紹介してなかったな）

「私は葉月姫香です。」
隣にいた彼女が自己紹介した
「あなたは…？」
「俺は九頭木…九頭木龍之介だ」

「無駄に格好いい名前だな」
ハルバートを持った野田がツッコミを入れてきた
「ねぇあなた達一回死んだ」
ゆりの何を言ってんだ質問に俺は
「向こうの世界だけだが」
「でしょうね…」
ガチャとゆりがマグナムをブローバックし
俺の眉間向けて撃った

（あれ…？みんながドン引きしてらぁ）
記憶がここで途切れた…

「何で飯前にグロい物みせんだよ」
やーさん顔の藤巻が手で口を抑えながら反論している
「浅はかなり…」椎名の的確なツッコミ
「仕方ないじゃない…百聞は一見にしかずって言うじゃない」
反省の色が見えないゆり

俺はあることに気付く
（あれ…床にしては柔らかいしソファーとは違う柔らかさだ…俺…
頭どこに乗せてんだ…）

目を開けると…目の前には葉月の顔があった

「あっ！気がついたんだ」
「やっと起きたか…羨ましい奴め」
日向がケッという感じて言った。

どうやら俺は頭ぶち抜かれ死んでた間　葉月に膝枕してもらっていたらしい

「たっく～殺されても死なないのかこの世界はよ～」

「あら！素晴らしい洞察力ねその通りよ。はいコレさっさと着替えてきなさい！」

俺と葉月はＳＳＳの制服を渡された
男子はブレザー
女子はセーラー服
だ

着替えも終わり本部に戻って見ると部屋は暗くなっておりスクリーンとプロジェクターがセットしてあり
ゆりはベレー帽を被っていた

「来たわね…さぁオペレーション始めるわよ！！」ゆりは微笑んだ
…その微笑みが不気味だと思うのは俺だけか…？

Episode:1 Hello heaven's world?（後書き）

次は九頭木と葉月の初仕事です

ちなみに読み方は
九頭木　龍之介
（クズキ　リュウノスケ）
葉月　姫香
（ハヅキ　ヒメカ）
です。

そのうち詳しいプロフィールをのせようと思います。

Episode:1 Hello heaven's world?

「今回は何をするんだゆりっぺ〜？またトルネードか？」
「「トルネード？」」
日向の意味不明な専門用語に俺と葉月は？だった

「いいえ、今回は新人二人の実力を見てみたいし……オペレーション［エンジェルビーツ］よ！！」

ゆりの言葉に俺、葉月そして音無以外は驚いていた。
「それはあまりにきつ過ぎやしないか？」
「そうだぜあれはヤバいだろ？」
「浅はかなり…」
松下五段と藤巻はゆりに反対意見を述べる…
あっ最後の椎名ね。

「おいおいそんなにヤバいのか？今回は？」
音無も知らないらしい
「ええ…天使にこちらから戦いを挑むのだから…あとこの作戦は未だに成功してないわ！」
ゆりは笑顔で答える
やめてくれその笑顔…怖すぎる…

「詳しく説明するわね。」
そう言うなりゆりは近くに置いてあるパソコンを触りスクリーンに学校の映像を映し出す…

「今回は下校中の天使を狙って貰うわ…そうねぇ…日向君！あなたはそこの三人組と一緒にいてちょうだい」

「りょーかい…」
ゆりの頼みに日向は快く答えた…俺ら新人と音無は日向と作戦をする事になった
……正直不安だ

「ＮＰＣに危害が及ばないようにガルデモにはゲリラライブをしてもらうわ。」
「了解！」
赤髪の岩沢は答えた…ってガルデモってなに！？…
「作戦開始はヒトハチマルマル！！それまで自由行動、解散！！」

あー終わった終わった。
時間は丁度昼飯時…
「おーい音無～九頭木～一緒に飯食いに行こうぜ～」　「あぁ…構わねえけど」
「俺も…」
そして俺は音無と日向について行く……あっ金が無ぇ！
「おい日向…俺金無いんだけど…」
「大丈夫俺のおごりだ心配するな！」
「えっ！？マジ！？サンキューな！」
俺の中で日向株が上がった「もちろん音無もな！」
日向は俺らにウインクをする
前言撤回…日向株下落…

食堂につき日向から食券を渡された。

［ミートスパゲティ／３５０円］

俺はおばあちゃんに券を渡しスパゲティを貰い日向が取っててくれた席に向かうそこには葉月もいた
「俺が誘ったんだひとりでオロオロしていたから！」日向はそう言った
葉月はトレイにカツ丼と天丼が置いてあった…何とも年頃の女の子の昼食じゃねぇ
「そんなに食うと太るぞ～」「大丈夫！大丈夫！あたし太りにくいから」
俺の注意に葉月は笑って答えた…（大丈夫か本当に？）
音無もやって来て俺達は飯を食べた
そんな時日向がカツカレーを食いながら俺達に聞いてきた。
「所でさお前らは何か人生に不満でもあった？」
「…！？何だよ突然さぁ？」
日向が訳わからん質問をしてきた
「この世界に来た奴はみんながそうだからさ～記憶の無い音無は意外は」
「えっ！？音無君記憶無いの？」
「あっ…あぁ…」
「大変だね～でもきっと戻るよ！」
「あぁ…ありがとう。」
葉月はニヘッと笑いながら話した…ふと気付くとカツ丼を完食し天丼も残り四分の一になっていた（恐るべし…）
「でッ？二人はどうなんだよ」日向が話を戻す
「あたしは…あるけど…話したく無いんだけど…」
「別に話さなくてもいいよ」「良かった～」
葉月は笑いながらそう言ったが彼女は震えていた…
多分ひどい人生を送って来たに違いない…

「九頭木は？」
「俺か？別に不満も無いし普通の人生だったよ、彼女もいたし」

あれ？おかしい何か大切な事を忘れている気がする
彼女の名前が思い出せない…何でだ普通覚えているだろ！何でだ…
「…木…九頭木！」
日向の呼びかけに我に戻った…
「どうした？」
「大丈夫？」
音無と葉月が心配そうな目で見ていた。
「あぁ大丈夫だ」

俺らは飯を食い終わった後学校案内をして貰った…

そして時間は午後６時
作戦開始の時間だ…
俺は渡されたコルトガバメントを構える…

Episode：1 Hello heaven's world？（後書き）

次でＥｐｉｓｏｄｅ：１終わりです。
ちなみにこの話は原作の一話と二話の間のつもりです
次はギルドです。

Ｅｐｉｓｏｄｅ：１　Ｈｅｌｌｏ　ｈｅａｖｅｎ'ｓ　ｗｏｒｌｄ？（前書き）

Ｅｐｉｓｏｄｅ：１最終章です。
急ピッチで仕上げたので誤字脱字があるかもしれません。
ではお楽しみ下さい！

Episode:1 Hello heaven's world?

現在俺は日向　音無　葉月とガルデモとやらがライブをしている食堂に近い第一連絡橋にスタンバイしていたゆり曰わくこのルートが天使が通る確率が高いらしい。

…出来れば戦いたくないのだが、

そうこう考えてる間にライフルのスコープを覗いてる日向が声を上げた

「天使のご登場だぜ！どうする～？ゆりっぺ！」

「どうするもこうするも当然攻撃よ！！」

「だとよ…じゃあガードスキル発動の前に…「待て！！」

俺は攻撃を始めようとする日向を止めた

「何だよ？九頭木～？」

「俺の実力を見るためのオペレーションだろ？なら今からそれを見せてやるさ」

俺は日向達の元を離れ天使の所に行く

「よっ！また会ったな」

何度みてもコイツは馴れないな…何つーか不気味だ…

「あなた…その制服…あっち側へ入ったの…？」

「あぁ…その通りだよ！」
俺は天使の質問に顔面への正拳突きと一緒に答えた。
最低だと罵ってくれても構わない
やらなきゃやられるのだから…心は痛むが……
しかし天使は気絶する所か怯みもしない…
（嘘だろ！？急所にちゃんと入れた筈だぞ！）
俺はすかさず天使を押し倒し頭に銃を構える…
「ガードスキルｄｉｓｔｏｒｔｉｏｎ」天使は何かを呟いたが構わず俺はトリガーを引いた
しかし
「……ッ！？いってーーー！！」
トリガーを引いた途端銃は暴発し破片が俺に刺さる
「ガードスキルｈａｎｄｓｏｎｉｃ」
次は天使の手から刃が出てきたまるで某漫画の主人公のように

（まずい…）
丸腰の俺
エモノがある天使
一気に形成は不利になった
しかし天使は待ってくれない
容赦なく切りかかる

ヤバいこのままだと死ぬ！
その時日向と音無が助けに来てくれた。
「この…無茶しやがって！」
「ゆりっぺから撤退命令だ！ずらかるぞ」
俺らは死に物狂いで天使から逃げた……
俺の初仕事は失敗となった

オペレーションが終わり俺らは食堂で飯を食っていた
「なぁ…お前生きてた頃何か格闘技やってた？」
日向がいきなり聞いてきた
「あっ…あぁ、家が空手道場だったし剣道も少しかじってた…」
「えっ！？ほんとに？カッコいいな～九頭木君」
横にいた葉月が笑顔で話に入ってきた…
「そりゃあ頼もしいぜ！」
日向が期待の眼差しを向ける
「あんま期待するなよな…」
飯の後葉月が色々聞いてきた…

葉月の笑顔が眩しかった
正直俺のハートにド真ん中だった！
（ヤバッ！！もしかしたら葉月の事好きになったかもしれない…）
俺はこの世界で何がしたいかはわからないが
少なくともコイツらとこの世界を楽しもう…
Ｈｅｌｌｏ　ｈｅａｖｅｎ'ｓ　ｗｏｒｌｄ.

Ｅｐｉｓｏｄｅ：１　Ｈｅｌｌｏ　ｈｅａｖｅｎ'ｓ　ｗｏｒｌｄ？（後書き）

次回予告

「アホがいた…」

「高いところはちょっと…」

「ＤかＥはかたいぜ！」

「うあぁぁぁぁぁぁぁぁ」

「コレなのか？」

「もう無理です…」

「走れ！」

「何でだよ」

「ｈｕｒｒｙ　ｕｐ！」

「あたしの過去教えてあげる…」

Ｅｐｉｓｏｄｅ：２　Ｇｕｉｌｄ

Episode：2　Guild？

俺がこの世界に来て一晩が過ぎた…

今は本部で作戦会議中だ

「高松君！報告をお願い」

「はい、武器庫からの報告によると弾薬の備蓄がそろそろ尽きるそうです　次一戦交える前には補充しておく必要があります」

参謀の高松が淡々と報告をするそれに付け加えるように大山が

「新入りも入ったことだし新しい武器もいるんじゃない？」

「そうね…わかったわ本日のオペレーションはギルド降下作戦と行きましょう」

（ギルド降下作戦…）

俺は地下にある超巨大な都市を想像した…

「おいどうした？音無」

隣で身震いした音無に日向が聞いた…

「高いところはちょっと…」

音無は空から降下を想像したらしい…

「何言ってんのよ！空からじゃなくて此処から地下へ降下よ」

（ヨッシャーー！）
予想が的中した俺は小さくガッツポーズをした
「なんだ地下か～……って地下ーーーー！！」
音無が安心から一転…驚きの声を上げた
「あたしたちはギルドと呼んでる地下の奥深くよ…其処では仲間達が武器を造っているの」
「天使にばれないようにか？」
俺は当たり前の事を聞いた
「そうね…其処を抑えられたら私たちの勝ち目は無くなるわ…」
ゆりは内線電話でギルドのトラップ解除を頼んだ
「よし！じゃあ今回はこのメンバーで行きましょ！」
「あれ！？野田君はいいの？」大山に言われ今気付いた
あのハルバート男が居ない
「あのバカはまた単独行動してんだろ…ほっとけよ…」
「はぁ～降下作戦…楽しみ～」
葉月は目をキラキラさせ呟く…
（ピクニック気分か？コイツは～）俺は頭を抱えた…

夕方俺らは体育館に集まった
ステージの収納庫から椅子を引っ張り出し隠し扉から地下へ降りた…

降りるとそこは炭鉱の通路みたいだった

「オイ！誰か居るぞ…」
藤巻が声を上げ持っていたライトで何かを照らすと
そこに居たのは……

「うぁ～アホがいた…」
野田だった

「音無とか言ったか？俺はまだお前を認めていない…」
「わざわざこんなとこで待ち構える必要あんのかよ？」
「野田はシュチュエーションを重要視するみたいだよ…」
「意味不明ね…」
野田のアホさ加減に日向　大山　ゆりは冷たくつっこむ
「別に認められたくもない」
「現にお前以外の奴らには認められてるし…」

音無の言葉に俺は付け加えをする

「何〜？」

野田に油が注がれ…ハルバートを構えこちらへ来る

「次は千回死なせたらッはぁーーー」

野田が一瞬にして消えた

消えたのでは無い

横から来たハンマーで飛ばされたのだ

野田死亡

「臨戦態勢！！」

ゆりの言葉にみんな武器を構える

「えっ！？何？どうしたの？」

「知るかよ！」

葉月は急な出来事にキョトンとしていた

「ギルドの対天使用即死トラップが稼動中なんだよ」

日向は俺と葉月を近くに寄せ説明した

「しかし何故？」

「解除忘れかな」

「俺らを全滅させる気かぁ？」

「いえ…天使がこの中に現れたのよ…」

「この中にかよ？」

「ｊｕｓｔ　ｗｉｌｄ　ｈｅａｖｅｎ」

「不覚…」

（あれ？俺今イロモノ達とリアクション取った？）

「私たちが居るのにですか～？」

葉月の何とも緊急感の無い喋り方　このピリピリした空気には似合わないな…

「あなた方はわかっていないようですが　ギルドを抑えられると武器の生産がなくなります　それでどう戦うのですか？」

「それは…」

高松の言葉に葉月は泣きそうになる

「私たちがどうなろうとギルドを守ることが優先事項ですからね」

高松は眼鏡を上げ直した

「だがトラップがあんだろいったん戻ろうぜ！」

音無は引き返しを要求しかし

「トラップは一時的な足止めに過ぎない…天使を追うわ…進軍よ！

！」

ゆりの一声

進む事になった…

Ｅｐｉｓｏｄｅ：２　Ｇｕｉｌｄ？（後書き）

なるべく台詞を原作通りにしたので疲れました。

今回は前半は原作通りにしますが後半はオリジナルにします。

お楽しみに！

Episode：2　Guild？

天使がギルド内に侵入したためそれを阻止すべく俺ら死んでたまるか戦線は罠が張られたギルドを進む…

「ねぇ～日向さん　トラップってどんなのがあるんですか？」

「あぁそれ俺も気になるわ」

「色々あるぜ～楽しみにしておくんだな」

葉月の質問に日向は勿体ぶりやがった…

「…！？何か来るぞ気をつけろ！」

一番後ろに居る椎名が何かを感じ取ったみんなが後方を注目する

すると地響きがし何が落ち土煙を上げた…

煙の中から現れたのは巨大な鉄球だった

「ヘッ！またベタな罠なこった…」

「んなことといってる場合か？」

俺のコメントに音無の焦りながらのツッコミと同時に鉄球が転がって来た

「走れ！」
椎名の言葉にみんなが走る
だが鉄球は速度を上げる
「みんなこっちだ！」
先を行く椎名が抜け道を見つけ出し俺　葉月　音無　日向　高松以外は其処へ逃げ込む…
（やべえこのままじゃ…仕方ない）
「葉月スマン！」
「ふへ？…キャッ！？」
俺は近くに居た葉月を道の端にやり鉄球と壁のわずかな隙間に身を寄せ鉄球から逃れた…
日向と音無も同じようにしたがしかし高松だけがそのまま走りやがて遠くから断末魔の叫びが聞こえた…
（ご愁傷様…）
俺はふと自分の手に伝わる柔らかい感触に気付く…
（あれ？これって？まさか…）
葉月の顔は真っ赤になっていた　そう俺は葉月の胸を触っていた…
「イヤーーーーーーーーーー！！」
大声を上げ葉月は男の弱点を蹴り上げた…
（わざとじゃないんですよ…）

高松をほって皆は進む…

「運が良いのか悪いのかわからん奴だな？」

音無が哀れんだ目で俺を見る

「羨ましい限りだぜ　俺なんて音無助けたら「コレなのか？」だぜ～」

日向は痛がる俺を半分笑い者ような目で見ている…

「それはホントだろ？」

「ちげぇーーよ！！でどうだった？」

「何が？」

「大きさだよ！胸の」

「あぁデカかったぜ～DかEはかたいぜ！」

俺のスケベ発言が虚しく響きみんなが白い目で見てくる　葉月は半泣きでゆりは銃を向けた…

「ゴメンナサイーーーマジで反省してます　ホント調子乗りすぎました」

「ホントに？なら許してあげる」

葉月に笑顔が戻り　許しを貰えた

ギルド降下の道のりは優しいものではなかった

レーザーでXに切り刻まれる松下五段

落ちてきた天井をひとりで支え

「Ｈｕｒｒｙ　ｕｐ！今なら間に合うｏｈ～飛んで行って抱きしめてやれ～」

と格好いい台詞を言いながらも犠牲にさせられたＴＫ

床が崩れる罠で奈落に落ちていく大山

そしてゆりの怒りを買い落とされる日向

我ら戦線メンバーも残るところ６人になっていた

「へっ…よく新入り共が生き残れたな…次はお前らだぜ」

藤巻の死亡フラグを立たせる台詞

（きっと死ぬのお前だ！）

俺らはより慎重に進んでいた…［カチッ］

俺の真後ろで嫌な音がした振り返るとすぐ後ろにいた葉月がやっちゃった顔をしていた…

案の定　床が無くなり俺と葉月は下へ真っ逆さま

「うあぁぁぁぁぁぁぁ！」
「きゃあぁぁぁぁぁぁぁ！」

「…きて……君…起きて…ねぇ起きて九頭木君！！」

俺は葉月に起こされた
落ちた場所はまるで独房のように密閉され　扉があったがこちらから開かない

俺は気付く

密閉された部屋

若い男女二人きり

年季が入った童貞の俺は口では言えない変な想像ばかりした…

「ねぇ！」

「はいぃぃ！？」

俺は葉月の声で戻ってきた
「暇だね～？」
「おっ…おう！」
「そうだ！！良いこと思いついた！」
葉月が何か思いついた顔をした
今までエロい事を想像していた俺にとって
（まさか此処であんな事やこんな事そんな事まで大人の階段何段も登っちゃうか？俺）
と他人が聞いたら変態のレッテルを貼られてもおかしくない考えしか出なかった
「あたしの過去教えてあげる…」
「えっ！？」
その一言で暴走していた俺の脳はフリーズした…
「また…何でだよ」
そう葉月は自分の過去を話したくは無いと言ってのに…
葉月は「ん～」と理由を探していた
数秒後［見つけた！！］と言うような顔をして
「それは～九頭木君が好きだから！」

（ハッ！？）また俺の脳がフリーズした…

「ハーーーーーーーーーッ！！」

Episode：2　Guild？（後書き）

原作前半パートの大半を端折ってしまいました。
次は姫香の過去の話になります

ゆりの過去話はもう少し後にします。

もしかしたらしないかも…

Episode：2　Guild？（前書き）

今回は姫香目線です

Ｅｐｉｓｏｄｅ：２　Ｇｕｉｌｄ？

あたしは今ギルド降下作戦中にトラップにはまり九頭木君と独房のような部屋に二人きりだ…

「それは～九頭木君が好きだから！」

「ハーーーーーーーーーッ！！」

彼はあたしの突然の言葉に声を上げた…無理もない昨日出会ったばかりの女に告白されたのだから

勿論あの言葉は嘘ではない

爽やかな顔立ち

黒色のミディアムヘアー

あたしにとても優しく接してくれ一目惚れだった

彼にならあたしの暗い過去を話せる気がした…

「その件は後にして…お前の過去って？」

彼は話を戻した

「実はあたし…小学校五年まで虐待されてて他に学校では苛められていたんだよ…」

座り壁にもたれたあたしは笑顔を作りながら話始めた…

あたしは物心がつく前から両親から虐待を受けてた

些細なことで殴られ　蹴られ　時々首を絞められた
そんな事が１１歳まで続いた近所の人達が警察へ通報しあたしは保護された

あたしは虐待によるストレスにより声と光を失った
失ったと言っても一時なもので回復するとお医者さんは言っていた
これで普通の生活が出来るそう思った…

しかし神様は酷かった…

あたしは視力は戻ったものの声は治りはしなかった

あたしは高校入った
病院でのリハビリで中学にはあまり行けず地元の学力の一番低い高校だった

其処は不良のたまり場だった
そんな所に入った喋れないあたしは格好の獲物だった
苛めは酷いものだった

言葉や物理的な暴力は勿論
物を隠されたり

ゴミ箱の中身を浴びせられたり

やってもいない事の犯人にされたりと全生徒は愚か教師まで苛めに参加した

最後はあたしを屋上から自殺したかのように見せ落とした
あたしは落ちる中神様を恨んだ
何でこんな酷い人生にしたのか？
幸せの「し」の字もくれないのか？
あたしが話し終えると隣に座る彼は驚いた顔しながら聞いてきた
「なんでそんな過去があるのにいつも笑っているんだよ？」
「それは笑わないと幸せが来ないからだよ！」
彼はあたしの頭を少し雑に撫でながら
「バカ野郎…本当は泣きたいくせに…強がるなよ…」
そう言ってくれた
嬉しかった…涙がこみ上げてきあたしは彼の胸で泣いた…
彼はそんなあたしを抱きしめながら
「辛いなら泣け　そん時は俺がお前の泣き場になってやる　泣くな
なんて言わねぇ泣いて吐き出す物吐き出して俺がお前をホントの笑
顔にさせてやる」
嬉しかった生前には無い幸せが此処にあった

そして神様への復讐より「彼といたい…」そんな思いが膨れ上がった…

Ｅｐｉｓｏｄｅ：２　Ｇｕｉｌｄ？（後書き）

ギルド降下作戦が終わったらそのまま原作三話に行くかそれとも何か小話を挟むか

どちらが良いか提案して下さい

Episode：2　Guild？（前書き）

ギルド編最終章です

Episode：2　Guild？

俺と葉月が落とし穴に落ちどの位経っただろうか？

葉月は話したくない過去を話し強がって笑っていた…
俺はそんなあいつを不憫に思い「泣くな…」と言った

今思い出すと恥ずかしい限りだ…

葉月はようやく泣き止んだ俺の服は涙でぐしょぐしょだった

「大丈夫？」

「うん！とってもスッキリしたよ！」

と今まで見たことのない飛び切りの笑顔で答えてくれて俺は安心した…

「…あっ！！そうだ葉月…お前　俺が好きだってホントか？」

「うんホントだよ！…あれ？やっぱ嫌かな…昨日出会った人に好きなんて言われるの…？」

葉月の心配そうな顔で聞いてきた…

「ははっ…あはははははははは」

「あーーー！笑うな～こっちは真面目に言ったのに～」
葉月は俺をポクポクと叩いた
「いや～悪い悪い　まさかお前も同じ事を思ってたんだなって」
「ほへ…？」
あいつはキョトンとした顔していた
「だから…俺はお前が好きだ！付き合ってくれ！」
「えっ！？ホントに？マジで？や…やった～！！」
狭い部屋で葉月は大喜びし跳ね回っていた
「落ち着けよ！」
「だって嬉しいんだもん！龍ちゃん」
「龍ちゃん～？なんだそれ？」
「恋人同士なのに名字呼びは変でしょ…龍之介だから龍ちゃん！！」
「そうだよな…姫香…」
俺は初めてあいつの下の名前を呼んだ
（なんか照れ臭いな…）
そんな事を思いながら俺らはまた身を寄せ合う…

ガチャッ

「お前ら大丈夫か～」

お気楽男が日向が俺らを助けに来た

俺らはすぐさま離れた

（気まず～）

「え～何？お前らできてんの？」

「うるせー！！」

「何やってんだよお前ら…早くギルドへ行くぞ」

取っ組み合ってる俺と日向に後から入ってきた音無は冷たい目で見てきた

「そうだ！！天使はどうなったの？」

「ギルドは破棄してオールドギルドって昔使ってた場所に向かう事になったよ…」

乱れた制服を直しながら日向は答えた

「おら…行くぞバカップル」

「誰がバカップルだ！！」

俺のツッコミも虚しく二人は先を行く

「行くか？」

「うん！！」

俺は姫香と手をつないでオールドギルドへ向かった…

Ｅｐｉｓｏｄｅ：２　Ｇｕｉｌｄ？（後書き）

次回予告

「何？その格好…」

「待ってました～」

「苛めだよね…これ」

「ハンッ！！そんなんが役にたつのか…？」

「無駄よ…」

「Ｙｏｕｒ　ｈｅｒｏ」

「男に興味はねぇー」

「もらったーーーーーッ！！」

Ｅｐｉｓｏｄｅ：３　Ｄｅａｔｈ　ｏｒ　Ａｌｉｖｅ

Episode:3 Dead or Alive?（前書き）

今回のＥｐｉｓｏｄｅは場面転換が多いので場面が変わるところで√を使います

Episode：3　Dead　or　Alive？

「あれ…？ここは…」

俺が居たのは生前に住んでいた街のよく知っている道だった

（おいおい…まさか今まで夢だったとか言うなよ…）

おかしな事に視界の色がセピア色だし制服は中学の時のだ…

（誰だあれ…？）

俺の少し先に見知らぬ女子がいた　こちらに手を振り俺を呼んでいる

俺の意識とは別に体が勝手に動き　手を振り返した…

その時…突然横から人が出て来た

奴は彼女を刺し逃げた…

俺は声を上げた

「――――！！　大丈夫か？おい――――――――ッ！！」

聞こえない…自分の声なのに聞こえない…

つーかこの子が誰かわからない

何なんだよこれは…

√

「…九頭木…お～い起きろ～」

目を開けると顔に手が伸びて来た

すかさず俺はその手をとり相手を地面に押さえつけた

「いだだっ！！ギブギブ！！九頭木…俺だよ！」

手の主は日向だった

「あ～スマン…ってなんでお前が居るんだよ？ここは俺と音無の部屋だぞ…まさか！ついに寝込みを襲うようになったか…」

「ちげぇよ！！」

「日向が俺達を迎えに来てくれてんだよ…お前がうなされてたから心配して起こそうとして」

音無が分かり易く説明してくれた

「そうか…そりゃ心配かけたな…スマン！」

「いいよ…それよりどんな夢見てたんだよ～？結構うなされてたぞ～」

「あぁ～忘れたよ……あと先行っててくれ　寝汗が酷いからシャワー浴びてから行くわ～」

「そうか…じゃあ戸締まり忘れんなよ」

そう言うなり音無と日向が部屋を出る

洗面所の鏡を見ながら俺は考えた

（あれは何だったんだろう？俺にあんな過去は無かった筈だ…駄目だ何かが抜けている）

俺はシャワーを浴び制服に着替え寮から出るとそこには姫香がいた

「もぉ～遅い！！レディを何時までまたすのよ…」

姫香が膨れっ面で話しかけてくる

「ゴメンゴメン　じゃあ行こうか…」

「うん！！」

さっきの夢が何だったのかわからないが今はそんな事は気にしない

どーせわかる日が来るだろう

俺と姫香は自販機でジュースを買い一服したあと

本部に行った

したらゆりに［遅いッ！！］と言うことでシバかれた…

Episode：3　Dead　or　Alive？（後書き）

今回はちょっと短めでした

Episode：3　Dead　or　Alive？（前書き）

エンジェルビーツ最終回最高でした…

Episode：3　Dead　or　Alive？

「ヒドい目にあったわ…」

この世界で生徒会長と言う大役を勤めている少女　立華　奏は先日この世界で神に抗う者達　［死んだ世界戦線］の武器製造場［ギルド］を制圧しようとしたところギルドごと彼女を爆破した彼女は爆破後から戻って来たところだ

「戻るのに半日もかかるなんて……滑稽ね…」

時間は昼近かった
（直井君に怒られるわね……きっと）
そんな事を思いながらとぼとぼと歩く

√

「さぁ今日のオペレーションを説明するわ……と言いたいけど九頭木君…何？その格好…」

ゆりは他の男子と違う俺の格好を見て聞いてくる
みんなカッターシャツにブレザーその他オプションを付けているが俺はと言うとブレザーを着ずカッターシャツのボタンは前回と言う着崩しまくっている

「だってよ～ブレザーは動きにくいから動きやすいようにしてんだよ…あっ！大丈夫大丈夫［ＳＳＳ］のワッペンは付けているから」

「そぅ…ならいいんだけど…イチャイチャしながら説明しないでく

れる…腹が立つ」
「ホントに見てるこっちが恥ずかしいぜ」
「フンッ！！だからお前は軟弱者なのだ」
「浅はかなり…」
「たくッ…自慢かよ…」
ゆり続きみんなが容赦なくツッコンで来る
「うるせーよ！！」
「苛めだよね…これ」
ゆりが話を戻した
「本日はオペレーショントルネードをやるわ！」
「またか…」
「そう言うなよ～これは大事な作戦何だからよ」
「すいません…トルネードってどんな作戦なんですか？」
全く名前からして意味不明な作戦　トルネードって何を巻き上げるだよ…
「生徒から食券を巻き上げる！」
ゆりが自慢気に簡単かつわかりやすい説明をしてくれた…って

「それただのカツアゲだろ！！何だよお前らＮＰＣに危害を加えないとか言って起きながらメタメタ加えてるじゃねぇか！それでもお前ら人間か！？」

「うむ…予想道理のツッコミ」

「今…ゆりっぺを侮辱したな撤回しろ」

野田にハルバートを突きつけられ松下五段に遠回しにツッコミがつまらないと言われた

（本当にこの頃俺への扱い酷くね？）

「そんな武力行使はしないわ…ただ天使には武力行使をするけど…配置は食堂を取り囲むようにするけど九頭木君は今回食堂から離れている第三連絡橋にいてもらうわ…姫香ちゃんは陽動班と一緒にガルデモのサポートして頂戴！」

「待てッ！！なんで俺と姫香がなんで別々なんだよ？納得出来ねぇよ！」

「それはだって…」

俺の疑問にゆりは笑顔で

「二人一緒にしたらそこの守備が弱くなるもの！」

「あべしッ！！」

まさかの口撃に俺は崩れ落ちた

「まぁそう言う事だ…オペレーション終わってからいちゃつけよ！」
日向は落ち込む俺の肩を叩き元気づけるがその顔は笑いを必死に堪えていた…
「納得した？なら作戦開始はヒトハチサンマル…オペレーションスタート！！」

会議が終わった途端ゆりが
「九頭木君！ギルドからあなたが頼んだ武器が来たわよ」
「待ってました～」
「なんだよ九頭木？何発注したんだ」
ダンボールを開けていると日向と音無　姫香が覗いて来た
「それは…じゃ～ん！」
中から取り出したのは太刀と脇さしそしてトンファーだ…
「うえッ！！お前そんなん使えるの？」
「前話しただろ空手と剣道をやってたって」
実際の所ギルドのリーダーチャーにも同じ事を聞かれてた…
「ハンッ！！そんなんが役にたつのか…？」

野田がズカズカとこっちへ来て聞いてきた

「やってやろうじゃねぇか今日のオペレーション見とけよな…」

俺は軽く挑発をしてやった野田はそのまま部屋を出て行った

「お前良くアイツに喧嘩売れたな…オペレーションの時に殺されても知らねーぞ」

音無は俺の心配をしてくれてるがそんなに気にはしていない

「さ～てオペレーションまで姫香と…って！？姫香は？」

「あ～葉月なら陽動班の説明を聞きに行くために岩沢と行ったぞ」

「ひでぶッ！！」

「あーあ…仕方ない俺達が話し相手になってやるよ」

落ち込む俺に日向は陽気に話しかけてくる

「男に興味はねぇー」

「俺かってねぇーよ！」

√

ここは第三連絡橋

俺はおニューの刀とトンファーを持って天使を待っていた…

「こんな所からくんのかよ～？あー早く終わんねーかなー！」

俺は不平不満を声に出していた

すると前方から靴音が聞こえ見ると目の前に天使が居た

「俺の所にお出ましですか…生徒会長さんよ…」

Episode：3　Dead　or　Alive？

（直井君にこってりと絞られた…）

昼から授業に参加になってしまい副生徒会長の直井君に

「全く…あなたは昼から登校するとは　もうちょっと生徒会長としての自覚を持って下さいでなければ奴らが調子に乗って手が付けられなくなりますよ！」

と二時間以上も説教された

「おい！ガルデモが食堂でライブやってるってよ！」

「マジ！早く行こうぜ！」

生徒たちがそんなことを言いながら走って食堂へ行くのが見えた

「……またか……」

頻繁に食堂で行われるゲリラライブ　面倒だけど私は生徒会長みんなの模範にならないといけない…

「ここからだと…第三連絡橋からが近いわね…」

前の彼は居るだろうか名前は確か……音無

彼は他のみんなとは違う

何故かそう思ってしまう

彼になら私がやろうとしている事を伝えられるかもしれない…

第三連絡橋についたそこに人影が居た
暗くて良くわからないが
「……もしかして…音無君……？」
雲の合間から月明かりが差し込みそこにいたのは…
音無では無く確か九頭木と言ったかな兎に角　音無では無いのは確かだ
目の前に居た少年は私に気付き変な武器を構えて
「俺の所にお出ましですか…生徒会長さんよ…」
√
俺はトンファーを回し踏み込み天使の頭部に一撃を与えた…しかし天使は物ともせず［ｈａｎｄ　ｓｏｎｉｃ］を出し切りかかる
「なめんな！！前とは違うんだよ…前とはー！！」
トンファーは元々防御目的で造られた武器　オマケに奴の動きは素人…避けるのも受け流すのも簡単だった
後はもう一発ドキツいのを食らわせれば…彼女が振りかざした
（ここだ…！）
「ガードスキル　ｄｅｌａｙ」

渾身の一撃がよけられた
そう奴は超高速移動で俺の背後に回り背中を斬りつけた

「この…くそ」

斬られたがそんなに傷は深くなく透かさず反撃したが奴はひらり
ひらりと避け俺の体が傷だらけになるだけだった

（どうすれば…そうだ！！）

「無駄よ…諦めなさい…」

天使は俺に前進して白刃を俺へ突き刺そうとした…

ザシュと白刃が刺さった
刺さっと言っても心臓や腹じゃない…俺の左手にだ

「なっ…！？」

天使は驚き　刃を手から抜こうとするが左手でガッチリと腕を掴ん
でるので逃げられない

「もらったーーーーーッ！！」

腰に差してある脇さしを鞘から抜き天使を切った

深く刀は入り天使の服は赤く染まっていく…そして彼女は力ずくで
俺の手を振りほどき逃げようとする

「待てよ…プレゼントだ！！」
俺は手榴弾のピンを抜き
天使へ投げた…
天使のもとで爆発した手榴弾は橋にセットして置いた他の爆弾を爆発させ
とてつもない炎と爆風が起き俺もろとも呑み込んだ…
√
ライブを最高潮を迎えているしかし天使はまだ来ない普通ならすぐ来るはずだ
「なぁ日向…おかしくないか？」
俺は近くに居た日向に話しかけた　すると日向は深く考えて
「そうだなぁ～いつもなら来て戦闘が起きるんだが…銃声の一発も聞こえない」
天使が来ず暇なせいかバリケード班のみんなはあくびをしたり体を伸ばしたりと緊張感の欠片もない
「おい！日向…今日九頭木の奴　銃持ってたっけ？」
すると日向が尋常じゃ無い程の汗をかきだした…
「「まさか……」」
俺と日向は他のバリケード班のメンバーを連れ九頭木の居る第三連

絡橋へ急ぐ

「あのバカ…一人で戦ってんじゃ無いだろうな…？」

「いや…あり得るぜ！」

「フンッ…雑魚の癖に」

「浅はかなり…」

「そんな事より早く行くぞ！天使相手に一人はキツい」

俺はそう言った瞬間　第三連絡橋の方です大爆発が起きた…

「な…なんだぁ～ありゃ～？」

「知るか！」

第三連絡橋に着くとそこはまだ炎と煙が立ちこめていてどうなっているのか確認できない

「誰か来るぞ！？」

藤巻が声を上げたそしてみんなが銃を構える

煙から出て来たのは…

√

（あちーまさかあそこまでの威力とは…まぁ天使はやれたんだ）

俺は橋の出口へ向かう出口付近に誰か居る

（まさか…天使とかじゃ無いだろうな…）

煙の中を抜けそこに居たのは音無や日向バリケード班のメンバーが銃を構えていた

「まっ待てッ！！俺だ九頭木だ！！」

みんなが俺を確認すると銃を下ろし駆け寄ってきた

「おい無事か…？天使は？」

「一応倒したさ…」

「マジかよ！？」

「信じられん…」

「Ｙｏｒ' ｅｒ ｈｅｒｏ」

「凄いや九頭木君」

みんなが驚いており俺は誇らしかった

「この馬鹿ヤロー」

「痛ッ！！なにすんだよ」

日向は俺の頭に拳骨を食らわした

「なんだじゃねぇ…なんで一人で戦ったんだ？今回は運が良かった

かもしれねーけどその身勝手で作戦が失敗するかも知れねぇんだぞ…もっと仲間を頼れ」

日向の言葉がずっしりと乗っかった…そう自分はどこかでコイツらを頼ってなかったかもしれない

「ゴメン…」

「解れば良いさ…よし！戻るか！」

さっきまで起こっていた日向の顔から笑った顔へと変わり俺らは食堂へ戻った…

√

戦線では俺の話題で持ちきりだった

（へへ～俺って有名人～）

「オホンッ！！」

日向がわざとらしく咳払いをし俺は焦った…

（そうだ過信するな～俺）

すると姫香がやって来て

「龍くん　一人で天使をやっつけたんだって？凄いな」

「いや～そんな」

「じゃあご褒美あげる！」

そう言うと姫香は俺の頬にチューをした…

「ガルデモのみんなまたしてるからまたねー」

と言い言ってしまった

「本当に見せつけてくれるぜ」

「羨ましい限りだ…オイ！？九頭木…大丈夫か九頭木～？」

俺はカンペキにフリーズした…日向の問い掛けにも答えられないほどに

「駄目だコリャ…先行こうぜ音無～」

「ああ…」

音無と日向は固まってる俺を置いていった…

今日は最高の１日だった

Ｅｐｉｓｏｄｅ：３　Ｄｅａｄ　ｏｒ　Ａｌｉｖｅ？（後書き）

次回予告

「…なぜ新曲がバラード？」

「音痴にも程がある！！」

「ジャカジャカジャンジャン～」

「クライストとお呼び下さい」

「凄いんですよガルデモは～」

「見に行くか？」

「それはダメだろ…」

「天使　出現しました」

「これは捨てて構わんな…？」

「それにさわるなーーーーッ！！」

Ｅｐｉｓｏｄｅ：４　Ｍｙ　ｓｏｎｇ

Episode：4　My song？

今　俺達は作戦本部で岩沢がバンドの新曲が出来たと言い演奏をしているのを聞いている
アコースティックギター特有の金属弦の綺麗な音色　岩沢の高い歌唱力
演奏が終わり岩沢が一息入れる　みんなの沈黙の中　姫香がパチパチと拍手をしていた

「…なぜ新曲がバラード？」
開口一番　偉そうに椅子に座っているゆりが聞く

「いけない…？」

「陽動にはねぇ…」

「あのさぁ…陽動って何んだ？」

俺は話が見えないので聞いてみる

「あなたトルネードの時聞いて無かったの？」

当たり前だ！一昨日のトルネードは一番遠い所で一人天使と戦ってたんだからな～　しかもガルデモがバンドってのも今知った…初めは漫才か何かと思ってたわ…

「彼女は校内でロックのバンドをやっており一般生徒から人気を勝ち得ている
私たちは彼らに直接危害は加えないけど　時には利用したり　妨げ

になるときはその場から排除しなければならない…そう言うとき彼女達が陽動するの」

「わかった説明ありがとう！」

「ＮＰＣのクセにミーハーだなぁ」

音無がやれやれと言った感じだった

「まぁそれだけ岩沢さんたちは凄いって事だよ！」

姫香が目をキラキラさせ語る

「で…ダメなの？」

「うーん…バラードはちょっとね　しんみり聞き入ったら私たちが派手に動けないじゃない…」

「はぁ…ならボツね…」

岩沢は残念そうな感じでギターをケースに閉まった

そしてゆりが

「それじゃ全員に通達する！音無君　九頭木君…カーテン閉めて」

カーテンを閉めるとゆりの後ろのスクリーンにＳＳＳマークが映し出された

「今回のオペレーションは天使エリア侵入作戦のリベンジを行う決行は三日後！」

「「「「おぉーーー！」」」」

「その作戦ですか…ですが前回は「今回は彼が作戦に同行する！」

ゆりの後ろからメガネをかけたちっこいのが出てくる

「よろしく…」

「椅子の後ろから～！？」

「俺達がくる前からスタンバってたのかよ…」

「メガネ被り」

「気にするんですか…高松さん？」

驚くみんな

「何の冗談だ…ゆりっぺ？」

「そんな青瓢箪が使いもんになんのかよー？」

野田と藤巻は反論する

「まぁまぁ…そう言わないでくれる」

「ハッ！なら～試してやろう」

「お前友達居ないだろ？」

「音無　それホントだから言っちゃ可哀想だって…」
新入りにハルバートを向ける野田に対して冷たく突っ込む音無　それに便乗してバカにする俺…
だが新入りは顔色変えずに（肝が座ってんな～）
「３．１４１５９２６５３５８９７９３２３８４６」
いきなり円周率を言い出した　これが何になるんだ…って野田が苦しみだした
「やめろーー！やめてくれー！」
「まさか円周率！？」
「やめたげてその人はアホなんだ！」
「メガネ被り」
「まだ気にしてるんですか？」
「そう…私たちの弱点はアホな事…」
「リーダーが言うなよ」
「いや～合ってるしょ！」
「前回の侵入作戦では私たちの頭脳のいたらなさを露呈してしまっ

た…しかし今回は天才ハッカーの名を欲しいままにした彼…ハンドルネーム［竹山君］を作戦チームに登用　天使エリアの調査を綿密にしてもらう」

「今のは本名では？」

高松が小さな声で突っ込むすると竹山が

「僕の事は［クライスト］とお呼び下さい！」

決まったしかし

「格好いい名前が台無しだぜ…」

「クラッシャーゆり…まて俺も頭はいい方だ！」

俺はゆりに反論した

「へーならさっきの竹山君みたいに円周率を言ってみなさい…」

「見てろよ～」

俺は深呼吸を一回し

「π！！」

辺りの空気が重くなった…

「見事に滑ったな～これ…」

「浅はかなり…」

「ぐはっ…！」

虫の息だった野田のトドメをさしただけだった　そんな俺を姫香は頭を撫でて慰めてくれる

「で…天使エリアってのは」

「天使の住処だよ！」

日向の言葉に俺と音無は考え込む

天使の住処…

何故か出てくるのはギリシャのパルテノン神殿だった

「中枢はコンピューターで制御されてんだぜ！」

「機会仕掛けか！？」

日向の後付けに俺と音無はまた考え込む

ダメだ…今度は白い悪魔の異名を持つロボットを乗せている木馬が出てきた…

「その何処かに神へ繋がる手段があるの」

「こいつはとんでもない作戦だ！」

ゆりの言葉に大山は大はしゃぎ

「今回は二度目とあって天使も警戒している　ガルデモにはいっちょ派手にやって貰うわ！」

「了解！」

「Ｇｅｔ　ｃｈａｎｃｅ　ａｎｄ　ｌｕｃｋ」

ＴＫの言葉が響く

「コイツも滑ったな…」

「お前程じゃ無いがな…」

音無の切れ味抜群の突っ込むが容赦なく俺に刺さったのは言うまでもない…

Episode：4　My　song？（後書き）

この頃暑いですね～

皆さんも暑さに負けないように

Ｅｐｉｓｏｄｅ：４　Ｍｙ　ｓｏｎｇ？

（あれ…俺何やってんだ？）
俺は気がつくと仰向けになって寝ていた…
空が青く澄んでいてとても綺麗だった

「おーい！大丈夫か九頭木～？」

日向が目の前に現れて俺は思い出した…

昨日から俺は判断力と反射神経を鍛えるべくバッティングマシーンを改造した
超剛速鉄球発射マシーン［韋駄天］でトレーニングをしており　日向にはトレーニングの助っ人をして貰っていた…

そしてさっき俺は腹に鉄球をおもっきり食らい死んでいたんだった…

「見事な死に様だったぞ～」日向が茶化すように言う

「うるせー！…っとそろそろ姫香と自販機で会う時間だわ…と言うことで付き添い有難う　では！」

と言い俺は姫香の元へと急いだ

「って何でついて来るだよ？お前は」

「俺も自販機で飲み物買いに行くんだよ！」

「ならおごれ！俺と姫香の分を」

なんて日向と話しながら自販機に着くとそこにはもう姫香が居た…

「もぉー遅いよ〜！」

「わりーわりー！日向が離してくれなくて　その代わり日向が飲み物おごってくれるって」

「くっ…テメー」

俺は適当な嘘をつき飲み物代を浮かした…しかしそのツケが［超健康黒酢豆乳青汁］で返ってきた…

三人でだべっていると横の掲示板に一生懸命何かを貼っているピンク髪の少女が居た

「何やってんだお前？」

「…！！むおーッ！！」

日向の問い掛けに少女は驚きこちらを向く

ピンク髪の少女は可愛らしい風貌とは裏腹に手錠や悪魔の尻尾などのパンクアクセサリーをまとっていた

「あっ！ユイちゃん！」

「あっ！姫ちゃん！」

二人は手を取りピョンピョンと跳ねている

「姫香　コイツ誰？」

「ユイちゃんは前の作戦の時知り合った陽動部隊のメンバーなんだよ！」

「初めまして！ユイって言います！って九頭木先輩と日向先輩じゃないですか！！」

「俺らの事知ってんの？」

「もちろん！デカい斧持った先輩が九頭木先輩は女にデレデレしている軟弱者と言っていて日向先輩はチャランポランの役立たずって話していました」

（野田か…）
（野田だな…）

（（後でしばく））

「所で何貼っていたんだ？」

「それはコレです！」

ユイは持っていたポーチから紙を出し　俺達に渡した

「何々…［Ｇｉｒｌｓ　Ｄｅａｄ　Ｍｏｎｓｔｅｒ　告知ライブ体育館占拠］～！！」

「天使エリア侵入作戦の派手な陽動って訳だ…」

「凄い事になりそうだよコレは！」

チラシを見て驚く俺　そこまでしないと天使の住処に行けない訳か…なんか燃えてきだぞ

「てか俺　ガルデモの演奏聞いた事無いな」

「マジですか！？それは早く聞きに行って下さい　凄いんですよガルデモは～　今だとこの館の三階でやってますから」

「見に行くか？」

と言い日向が俺の肩を組み連れて行く

「じゃあねぇ～ユイちゃん！」

と姫香はユイに手を振り
わかれた

日向に連れられて三階まで登ってみるとギターやドラムの音が聞こえてきた
そして彼女らが演奏を廊下から見ていると日向がメンバーの名前を教えてくれた
センターでギターヴォーカルをしているのが岩沢
上手（かみて）でギターを弾いているのがひさ子
下手（しもて）でベースを弾いているのが関根

ドラムを叩いているのが入江
メンバーの名前と顔を一致させながら聞いていると音無がやって来た
「お前も聞きにきたのか？」
「ああ…どんなのか気になってな」
彼女らの演奏は凄い物だった　向こうの世界でも通用するだろうなと思いながら聞き入っていると演奏が中断した　どうやらひさ子のギターの弦が切れたらしい
「悪い　すぐ張り直す」
「ＯＫ　じゃあ少し休憩するか」
休憩し始めた彼女ら　岩沢がこっちに気づき出てきた
「凄かった…ありゃ一般生徒も熱くなる訳だ…」
「ありがと…音無だっけ？あんた記憶が無いんだってな」
「ああ…」
「そりゃ幸せだ…あんた達誰かの記憶を聞いた？」
「俺は姫香のしか聞いてない」
「俺もゆりのしか」

「俺は大体の奴のを知ってるがな」

「日向　あんたには聞いてない…」

自慢気に言った日向に岩沢は冷たく言う

「姫香の過去はどうか知らないけど　ゆりのはあれは最悪ね…」

（ゆりの過去ってどんなのだろうな…後で聞いておくか）

「あたしのは大した事じゃない…ただ好きな歌が歌えなかった　それだけ…」

岩沢が自分の過去を話した

「両親はいつも喧嘩ばかりしていた　あたしは自分の部屋も無く家の隅で小さくなっていた…そんな時あたしは［ＳＡＤ　ＭＡＣＨＩＮＥ］てバンドに出会った　そこのヴォーカルもあたしと同じ恵まれない家庭環境で過ごしていたらしい　あたしはそのバンドの歌を聞いた　その歌はあたしの心に響いた

あたしは何だか救われた気がした…そして雨のゴミ捨て場で出会ったギターを持ってあたしはストリートで歌った　それからあたしの人生はバイトとライブとオーディションの毎日だった　もちろん教師は反対した…しかしあたしは早く卒業してあの家を出て行くそう思っていた…

ある日あたしは倒れた…　次目覚めた時あたしは声がでなかった

頭部打撲による失語症だった　原因は両親の喧嘩を止ようとした時のとばっちりだった

あたしは神を恨んだ…恨みながらあたしの人生は終わった…」

なんとも言えない空気が漂っていた…岩沢の目は理不尽な人生そし

て神を呪った目をしていた

「岩沢～？」

「あぁひさ子　すぐ行く！」

弦を張り直し終えたひさ子が岩沢を呼びに来た

教室に入っていった岩沢がまた出てきて

「記憶なし男！やるよ！」

飲みかけの水を音無に渡した岩沢は練習に戻る

「何だよ？お前らニヤケて気持ち悪い…」

「いや～何にも　なぁ姫香～」

「うん！何にも～」

「隅におけない奴だぜ～音無」

「アホらしッ」

音無は気にせずもらった水を飲む

「ふぅー　じゃあ今日はこの辺で終わろうか…？」

「そうだね」

「やっと終わった～」

「あっつー！この後の活動日誌書くのめんどくさ～」

「あれ？まだ居たのあんたたち」

岩沢が俺と姫香に気づいたそう…音無と日向は先に帰ったが姫香が最後まで居たいと言うので一緒に居た

「岩沢さん！あたしもやってみたいです！」

姫香はこれが言いたいから残っていたのか…

「うん…いいよ　じゃあギターの弾き方わかる？」

「全然わかりません！」

「じゃあまずギターを貸したげるから　まず簡単なコードをやってみようか」

姫香が岩沢のギターを貸してもらい手取り足取り教えてもらう

その間俺はひさ子　関根　入江の三人に質問攻めだった

五分後

「ダメだ～全然出来ない～指痛い～もうやめる～」

姫香が弱音を吐いた

「諦め早いな…お前」
そう突っ込むことしか出来ない
「次はヴォーカルがしたい～」
「わがまま言うな！諦めずに頑張れよ！」
「いや…あんたの彼女はギターは全くダメだったから他のをしたほうがいい…」
そして姫香は岩沢のギターの演奏付きで［Ｃｒｏｗ　Ｓｏｎｇ］のサビを歌ってみることに
♪～
「ふぃんだ～うぇい～ここから～」
彼氏の俺が言うのも可哀想だが…酷すぎる！！
猫型ロボットアニメに出てくるガキ大将並みの下手さだ！
～♪
「ふぅ　どうだった？」
「音痴にも程がある！！」
「ひど～い龍ちゃん」
酷くない…みんなの気持ちだ！
「全然音楽センスが無いなお前」

「むっ…なら龍ちゃんやってみてよ！」

「九頭木は経験は？」

「軽音部の友達に少し教えてもらったぐらいしかない…岩沢　ギター借りるぞ」

（あれしか出来ないが…）

俺は体でリズムを取り弾き始めた

♪～

偽りはない

虚飾もない

もともとはそんな風景画

絵筆を使い書き足す未来

僕らが世界を汚す

彩りはない　あまりに淡い意識にはそんな情景が

忘れられない

いつかの誓い

それすら途絶えて消える

ほほを撫でるよな霧雨も

強かに日々を流す

～～～♪

気付いたら一曲丸ごとやってしまった…みんなの反応は

「どうだった…？」

「荒さは残るが初心者にしては上手い方だよ」

ガルデモの評価は高いものだった

帰り道

「オイ！姫香～なんか起こってるか？」

「全然！！」

「機嫌治せよ　今度俺が教えてやるから…」

その言葉に姫香が反応する

「本当に？」

「ああ…マジだ！」

「やった～！」

姫香が嬉しそうに飛び跳ねキダーを弾く真似をしていた

「ジャカジャカジャンジャン～」

「なんだそれ…？」

Episode：4　My　song？（後書き）

今回は少し長めに書きました

ちなみに九頭木が作品中に歌っていたのは

ＡＳＩＡＮ　ＫＵＮＧ－ＦＵ　ＧＥＮＥＲＡＴＩＯＮのムスタング

を使いました

Episode：4　My song？

（またか…）
ここ最近俺は同じ夢を見るセピア色の視界
誰なのかわからない少女
黒い影に刺される少女
倒れ込む少女に駆け寄る俺そして少女は俺に言う
「どうして…助けてくれなかったの…？」

「た…たこわさ！」
俺は自分の変な寝言で飛び起きた
「寝言で起きるってベタな奴だなぁ～」
俺の寝言で起きたのだろう音無が大きなあくびをしながら言う
「またあの夢か？大丈夫か…今日のオペレーション」
「ああ…大丈夫だ…ありがとな音無」
訳の分からない夢にうなされる俺を音無は心配してくれた
「本当に無理するなよ…今日は大事なオペレーションなんだから」

そう今日は天使エリア侵入作戦の実行日及びガルデモの告知ライブなのだ
姫香は陽動班に入れられてまた別々なのが不満だが

まもなく作戦開始時刻だ

「あっあーあー聞こえるか？」

「聞こえるよ～！」

俺は姫香とインカムで電波チェックをしていた
何故俺らがインカムを持っているかと言うと
作戦前にゆりにどうにかならないか相談してみたら

「じゃあコレ渡しておくから作戦の時それでライブ状況の報告を受けなさい！
と言われた
言わば俺と姫香は体育館と天使エリアを繋ぐ連絡係りなのだ

そして今俺らは天使エリアの前に居る

「日向君…まだなの？」

「もうちょい…っと開いたぜ！」

日向がピッキングで扉を開け日向　野田　松下五段　ゆり　竹山
俺　音無の順にエリアへ侵入

「侵入成功ね…音無君何やってるの早くドア閉めなさいよ！」

「ってこれ…」

扉を閉め音無はスイッチに触れ電気を付けた

「ただの部屋荒らしじゃん！しかも中枢はコンピューターで制御してるってパソコンが一台あるだけじゃねーか！」

「何をやっている？貴様」

「女子寮だぞ！早く電気を消せ！！」

音無の行動に焦る野田と五段　それに頭を抱えて呆れる日向とゆり

「落ち着けよ音無　もしかしたらここから本当の天使エリアへ行けるかもだろ　なぁゆり？」

「いえ…ここが本当の天使エリアよ」

「はっ…！？」

ゆりの一言に俺の想像が打ち砕かれた…

「じゃあただの部屋荒らしじゃん！おまえ等がそんな変態とは思わなかったよ…コンピューターもスパコンだと思ったらただのデスクトップじゃねーか！！」

「ほとんど音無の突っ込みと同じじゃん」
ゆりはそんな俺を無視してパソコンを起動させる
「パスワードですか…」
「ええ…前はみんな解らなかったの」
「なるほど…僕の力の見せどころだ…解析に入ります」
竹山は自分のノートパソコンを天使のパソコンに繋げ何か作業し始めた
「ほぉ一応は使えるようだな…」
「コラコラ　プライバシーの侵害だ！」
止めさせようとする音無は五段に押さえられ野田にハルバートを突きつけられた
「オイ…九頭木　どうした窓の方ばかり見て？」
「ああ五段…いや何でもないよ…」
（なんだ…この胸騒ぎは？）　体育館の奴らが気になってしょうがない…
「オイ…姫香　ライブはどうなってる？」

√

（どうして？集まりが少ない…）
一曲を終えたが体育館の三分の一しか人は集まっていない　メンバーも不安がっている

（もっと集まってくれ　仕方がない…）

あたしは［Ａｌｃｈｅｍｙ］のイントロを弾き始める　ひさ子が少し驚いていた…無理もないこんな序盤で歌う曲じゃないしな

徐々に増え続けるＮＰＣ　体育館も次第にうまってくる
一番を歌い終わった時

「貴様ら何をしている早く寮へ戻れ！！」

教師たちが来やがったしかし生徒たちも教師へ反発している　そんな中

（現れやがったな天使！みんなもっと盛り上がってくれ…いやそうするのはほかの誰でもない！あたしたちだ！）

√

「天使　現れました」

「了解！竹山君…」

「今パスワードを高速で割り出すプログラムを走らせてます…すぐ終わります
あと僕のことはクライストとお呼びください！」

「オイゆり！天使が現れたってよ！」

「知ってるわよ！遊佐から報告があったわ　現状報告はいいから部屋でもあさってなさい！」

「それはダメだろ…」

俺が拗ねているとパスワードの解読が終わったらしい
「良くやったわ竹山君！すべてのデータを移して」

「無理です！！時間がかかりすぎます　あと僕のことはクライス「ハードディスクごと引っこ抜くか～？」

ゆりと日向が竹山を押しのけて画面を見る

「ばれるじゃない…とりあえず竹山君…怪しいデータを見せて頂戴！」

「クライストです！！」

竹山が必死に自己アピールしながらファイルを開く

「学生リスト！？」

「ＮＰＣ…いやあたしたちの混ざってる…」

「ただの名簿だろ！怪しいデータなんて無い　ただの犯罪じゃないか」

「だまれ！！」

野田は音無の口にハルバートを突っ込む　そんな時インカムから

「ガルデモ捕まっちゃったよ～」

と姫香から報告が入る

「オイ！ガルデモ取り押さえられたぞ」

一応ゆりに報告をしておく

「チッ！ここまでね…」

「今回も得るもの無しか～」

みなが退散の準備を始める

√

（クソ！天使は行けたが教師たちは駄目だったか）

あたしたちは押さえられてしまった

生徒たちが反発するも教師たちは聞く耳を持たない

「今まで多目に見てやっていただけだ図に乗るな！」

天使も帰ってしまった…

「楽器は全て没収だ！文化祭じゃあるまいし二度とこんな真似はさせんぞ」

そう言いながら教師はアイツを掴んだ

「これは捨てて構わんな…？」

（またか…）

「それに…」

（また神はあたしから歌を奪うのか…）

「それにさわるなーーーーッ！！」

あたしは押さえてる教師を振り払い　アイツを奪い返し…歌った

√

みんながバレないように片付けていると天井のスピーカーから岩沢の歌が聞こえてきた

「…！！竹山君！」

「はい！クライストとお呼びください！」

またみんなはパソコンを見始めた

しかし俺はそんな気になれない　徐々に胸騒ぎが大きくなってくる…

√

（これがあたしの人生なんだ…こうして歌い続けて行くことが…それが生まれてきた意味なんだ…あたしが救われたようにこうして誰かを救っていくんだ…やっと…やっと見つけた…）

√

彼女の歌は心に響いてきた知らないうちに涙が出ていた…そんなとき

「ゴト…」

姫香のインカム越しにギターが落ちる音がした…

（まさか…）

「お…おい…姫香…何があった…？」

自分の心臓が速くうっているのがわかる

駄目だ悪い予感しかしない

「岩沢さんが…岩沢さんがどこかへ消えちゃった…」

悪い予感が当たってしまった…

Episode：4　My　song？（後書き）

次回もお楽しみに

感想とかください

Episode：4　My song？

翌日　本部で報告が行われた

「わかったことをまとめてくれ…ゆりっぺ」

「天使は自分の能力を自分で開発してた…それは奇しくもあたしたちが武器を造る方法と同じだったのよ」

「それってどう言うこと？」

同じ所を行ったり来たりしながら報告をするゆり　大山はゆりの報告の意味が解らなかったのかさらに聞き出す

「確信が無いの今はまだ言えない…」

そうはぐらかすゆりに藤巻は

「なんでだよ水臭ぇぜゆりっぺ」

と言ったがゆりは窓を見ながら途方に暮れていた…

「では…もう一つの案件です」

と言った高松がギターを机に出し

「岩沢さんはどこへ消えてしまったのか…？」

「天使に消されたんじゃねーのか…」

「ライブ中だぞ！」

「じゃあ何が起きたって言うんだ？」

「誰がいったい岩沢さんを…」

みんなが岩沢の消えた事に色んな意見を述べた…

「誰も…ただあの子が納得したちゃった…それだけの話よ」

ゆりの一言にみんなは岩沢について触れなかった…

（納得か…あいつはこの世界で何を納得したのだろう？）

俺はそう思いながら天井を見る…

（そういやー岩沢のライブ　生で見てなかったな…）

Ｅｐｉｓｏｄｅ：４　Ｍｙ　ｓｏｎｇ？（後書き）

次回予告

「プレイボール！」

「大事なのはフラグだ！！」

「勝負だ…小僧」

「使えない人はただの生ゴミ…」

「ユイにゃん」

「それだけで俺リストラーーッ！！」

「「「えーーーーーッ！！」」」

「首だな！」

「次…ちゃんとやらないとお仕置き（殺す）だぞ！」

「お前…震えてるのか？」

「そいつは…最高に気持ちがいいな…」

Ｅｐｉｓｏｄｅ：５　Ｄａｙ　ｇａｍｅ

Episode:5　Day　game?

（暑い…なんで俺こんな事やってんだ…）

夏の日差しが野球グラウンドに立つ俺に容赦なく照りつける

（早く終わんねーかな…もう体が動かねし　口ん中砂利だらけでぇ）

すると金属バットの金属音が聞こえた　球は俺の頭上に落ちてくる…

「コイツが岩沢の代わりだと？」

「あり得ねぇ」

俺はあん時のことをまた思い出していた　すると横から

「ユイって言います！よろしくお願いしまっす！！」

「おい音無　何でユイが居るんだ？」

さっきまで魂が飛んでた俺にはユイがここに居る意味が解らなかった

「お前なんも聞いてなかったのかよ？ガルデモのニューヴォーカル候補だってさっき葉月が連れてきたんだよ」

（コイツ前まで下っ端だったんだろ　えらく出世しようとするな～）
なんて思った
みんなはと言うと葉月と九頭木　音無以外はユイがヴォーカルになるのを反対している

「いや…ちゃんと歌えますから　どうぞ聞いててください」
ユイはギターを手に取り　歌い始めた

歌はと言うと岩沢程じゃないが上手かった
（名乗り出るだけはあるな…しっかし…心に訴えるものがねぇ）
そうユイはただ歌ってるだけに過ぎなかった

やっと曲が終わったがユイのアピールは終わってなかった

「イエーイ今日は来てくれてありがとっ！！」

と言い矢沢もびっくり　小柄なユイがマイクスタンドを蹴り回したがスタンドは天井に刺さりコードがユイの首に絡まり　首吊り状態となった…

「うぉ！？なんかのパフォーマンスか？」

「デスメタルだったな…」

「矢沢もびっくりだな…」

「ｃｒａｚｙ　ｂａｂｙ」

みんなは完全にパフォーマンスと思いこんでいる

「違いますよ！うわーんユイちゃーーーん！！」

葉月がすぐさま助けにいくユイは助けてもらい　その場に倒れ込んだ…

「とんでもないおてんば娘ね…クールビューティーだった岩沢さんとは正反対ね…」

「ガルデモのリードヴォーカルとしてはいかがなものかと」

「他の奴探ないか？」

「そうするか！」

みんなが口々にユイを反対する　俺もそれに賛成した

「くぅおらぁ～」

ユイはすぐ回復し　ぷるぷる震えながら立ち上がる

「ちゃんと歌えてただろ？こう見えても岩沢さんの大ファンで全曲歌えるんだからな！！」

必死になって抗議するユイ

「心に訴えるもんが無かったな～」

「ありませんね…」

「ねーな」

「つーか少し音ずれてたし」

俺の一言にみんなが賛同し九頭木は痛いとこを突いた

「くぅおらぁ～そんな感性で若い芽をつみ取りにかかるな～それでもお前ら先輩か？」

今にも暴れ出しそうで葉月に抑えられてるユイがキャンキャン吠える

「うるせー奴だな…」

「すでに言動に難ありだぞ」

（うわー野田にだけは言われたくないな…）

「どうするんだゆり？」

「仕方ない後はバンドメンバーに任せましょ！」

音無の問にゆりっぺは面倒くさそうに答える

「ホントですか？やったーひさ子さんと組める～　ひさ子のあの殺伐としたリストバッキン　頭どうなってるんすかね～」

「首だな！」

「首だろ！」

「首ですね！」

「えーっあたしなんか悪いこと言いました…！？」

ゆりっぺはそんなユイを見ながらため息をつき

「バンドがこんなんじゃ球技大会で土派手な作戦は無理ね」

「えっ球技大会なんてあるのかよ？」

ゆりっぺの言葉に驚く音無後ろでユイが五月蠅いが無視をしよう…

「当たり前よ…学校なんだから」

「大人しく見学か～？」

俺がやれやれという感じで言うとゆりっぺは不気味な笑みを浮かべながら

「参加するに決まってるじゃない」

「参加したら消えてしまうんじゃ…」

九頭木が話に入ってきた

「バカね～当然ゲリラ参加よ！　いい各時でチームを作りなさい

一般生徒より不甲斐ない成績を残したチームは　死より恐ろしい罰ゲームよ」

みんなに対して言い渡すようにゆりっぺは言った…どうやら球技大会が今回のオペレーションらしい

ゆりっぺの発言にみんなから不満の声が上がる

（まぁあれはな…こうなるわな…）

「死より恐ろしいってなんだよ？」

「派手に出来ないからヤケクソになってないか？」

小さく呟く音無と九頭木に俺は二人の肩に手を乗せ

「俺にはお前らが必要だ」

二人は面倒臭そうに…

「「コレなのか？」」

「ちげーよ！チームの事だよ　組もうぜぇ　ゆりっぺは本気だ負けたらえらいことになる」

「俺はいいけど…」

快く引き受ける音無だが九頭木はと言うと

「姫香もだ！姫香を入れるならいいが…」

九頭木は今度こそ葉月と一緒にオペレーションをしたいらしい…葉月が役にたつかはわからんが仕方ない…

「わかったＯＫだ」

九頭木とがっちり握手をする交渉成功

「おい…他のメンバーに宛てはあるのかよ？」

音無が心配そうな顔で聞いてくる

「任せろー人望で生き抜いてきた存在だ…最高のチームを作ってやるぜ！」

「凄い自信だな…日向」

そして俺は三人を連れメンバー探しに出た…

Episode：5　Day　game？

球技大会のメンバー探しに出た俺　音無　九頭木　葉月まずはガルデモのリードギター　ひさ子を入れようと思ったが…

「うぇーー！高松のチームに入ったーーー！？」

「うん…」

まさかだった……それと後ろで九頭木が腹抱えて笑いを堪えてるのは気のせいか？

「なんで待っててくんねぇーの？意味わかんねぇよ！」

「あんたの誘いを待つ方が意味わかんないわよ…あんたより高松の方がましでしょ」

と俺をバッサリと切り捨てるなりあいつは行ってしまった…

「あいつ運動神経良いのに…いった～」

「素晴らしい人望だな…」

「まだチャンスは有りますよ！諦めないでください！」

音無は哀れんだ目で俺を見て葉月は励ましてくれる…まぁこいつ等はいい　俺が許せんのは後ろで明らか笑いを堪えている九頭木だ！

「……で次は誰にすんだよ…プッ…クックックッ…」

笑いを堪えている九頭木が聞いていた

「次はちぃとばかし卑怯だが松下五段を入れよう！頼んだぞ～松下五段！」

「もう取られてんだろ？」

半分諦めモードの音無が俺に聞く　しかし…

「大丈夫俺　あいつの事信頼してんだ…なんつーかマブ達なんだ…はは！照れるな…」

そう思っていた…だが

「あーーーッ！？竹山のチームに入った？」

「ああ…断る理由も無かったからなっ…」

五段は木に帯を巻き背負い投げの練習をしながら言った

「何故だ五段！お前の事は信用してたのに…」

「ああ…今度から肉うどんが当たったら優先して回すって言ってくれたしな…」

「に…肉うどん？」

そう俺は学食のたかが三百円の肉うどんに負けたのだった…

「さっきこいつ…『マブ達なんだ…はは！照れるな…』って言ってたぞ～」

「バラすなよ～」

恥ずかしい過去をバラす音無の胸ぐらをつかみ止めさせようとする俺に

「いや～面白い物見せて貰ったぜ　まさか人望で生き抜いてきた日向さんがペラペラの紙切れに負けるなんて…しかも三百円より低い人望って……ブフー！」

「笑っちゃ駄目だよ龍ちゃん！例え日向さんの人望が三百円以下でもそれが日向さんの良いところなんだから…プププ」

「うるせーよ！ほっとけ！！」

九頭木に加えて葉月までもが俺を罵ってきた

（…何！？この腹黒カップル）

「クソ～次はＴＫだ！」

「なぁなんでみんなＴＫって呼んでんだ？」

音無が真っ当な質問をして来た…後ろのバカップルうぜーー

「知らねー本名も解らない謎だらけの人物だ…」

ここまで主力メンバーを取られてきたんだ　ここは名誉挽回のためになんとしてもＴＫをチームに入れないといけない…

「ガッテム！」
一足先に高松が交渉に成功していた　なんでメガネが邪魔してくるだー！

「あらら～また失敗～」

「もうあれは人望が有る無いの話じゃないよね？」

ホント後ろのバカップルの言葉が俺の心に深く刺し込まれる…
（マジ勘弁してください…）心の中でそう叫ぶ俺がいた…

「なぁ種目って何？」

「野球だよ野球！」

「となるとメンバーはあと5人…無理じゃね？」

完全に諦めモードに入った音無　するとどっかから高笑いする声が聞こえた…
みんなが声のする方を見るとそこには…

ユイがいた…

「ハッハッハッ～お困りのよいですな～」

階段に片足乗せ　上から目線のユイ　さっきからバカップルに罵声

を浴びせられた俺にとってはマジで腹が立つ

「なんだ…悶絶パフォーマンスのデスメタルヴォーカルか…」

「そんなパフォーマンスするからに見えるかー」

「見えるよ十分…」

耳元で騒ぐユイを鬱陶しいので軽くあしらったがユイは引き下がらすに

「メンバー足りないんでしょ？あたし戦力になるよ～」

「戦力～？」

（どうみてもなりそうにないが…）

「それなら他のチームに行ったらどうなんだ？」

はっきし言って足手まといにしかならなさそうなので他のチームに行くように言うとユイは視線を逸らした　（もう行ってたのかよ！可哀想に……！？待てよ　顔面にボールを食らい危険球　相手ピッチャー退場）

「当たり屋か！よし採用」

「おまえの脳味噌とろけて鼻からこぼれ落ちてんじゃねぇのか！！」

と言い俺の顔におもっきり回し蹴りを食らわすユイ

あっ少しパンツ見えた…

「てっ…テメー…俺先輩…だぞ…」

「おや…先輩のお脳味噌　おとろけになってお鼻からおこぼれになっておいででは？」

顔を押さえ跪く俺にしゃがみこみユイはチョップしやがった…これには我慢の限界を超えた

「なるかーーーーッ！！」

俺はユイの顔面に蹴りを入れた　もう男として最悪とか言われてもいい…

「痛いです」

ユイはうつ伏せになりながらそう漏らした

「俺かって痛ぇよ！」

「でも運動神経は良さそうだな…」

音無がもうコイツでもいいかって顔をしてた

「音無も何言ってんだよ！こんな頭のネジ飛んだ奴の仲間なんて思われたくねぇよ！」

もちろん仲間は欲しいがこいつは別だ…すると九頭木が爽やかな顔で

「諦めろ！これがお前の限界だ…」

「んなワケあるかー！そろそろお前もしばくぞ…」

「でも目付けてた人たちみんな取られてますよ…」

葉月の一言が重かった　でもってユイがここは攻め時とばかりに

「そうそうみてましたよ～だからユイにゃんが加勢しにきたのです！」

「あーもっぺん言ってみろ…」

「ユイにゃん」

「だからそう言うのがムカつくってんだよーーー！」　「ギブギブギブ～」

マジでさっきの言動にはムカついたので卍固めを決めてやった

「おーい行くぞ」

音無と九頭木　葉月はそんな俺たちをほったらかしにして行く

〔日向はユイを仲間にした〕

「おい！！確定かよ！」

どこからか聞こえた声に俺はツッコミを入れた

Episode：5　Day　game？

不本意ながらユイを仲間に入れ　俺たち一行が次に誘うのは…

「椎名っち！どこだー？出てこいよ椎名っち～！」

そう椎名だ　天使にもひけ劣らない戦闘力　きっと戦力になると俺は踏んだ　そして彼女の縄張りである体育倉庫に来た

「何用だ…」

と倉庫の隅の方からこちらの様子を伺っている

「探したぜ！お前運動神経良いじゃん！」

「測った事も無い…」

「ぜってーイケるって！やろーぜ野球！」

あまり乗り気で無い椎名が何かを思い出しながら話始めた

「あの日から…そこの新入りに遅れをとってしまった理由をずっとここで考えていた…」

「ギルド降下作戦の事か…確かに音無一人残ったのは　ありゃ～伝説もんだよな…」

そう死んだ世界戦線には［九頭木　一人で天使殺ったてよ伝説］と［音無　新入りのクセにトラップだらけのギルドに降下出来たってよ伝説］がある

「それはたまたま運が良かっただけで…」
「まぁそんな謙遜しなさんなって！」
控えめな態度でいる音無に九頭木が肩を組んで話す
「全ての力に置いて私はお前を遥かに凌いでいた筈だ…」
「だろーな」
「唯一劣っていたとしたら…それは集中力！」
「それもお前の方が上だろ」
「集中力より注意力なんじゃね？」
そう言う音無と九頭木の話を聞かず椎名は
「そしてあの日以来私は竹箒を右手の一点で支えている」
隅から出てきた椎名の手には竹箒が支えられていた
「あの日って何時からだよ？」
「前回と前々回の話の時出てきてたけど　持ってなかったよね…」
「アホですね…」
ユイが本人に聞こえないように俺に耳打ちをしてくる
「アホだが戦力だぜ」

「うむ…いい頃合いだ…勝負だ…小僧」

「箒立てて何の勝負だよ？」
アホ過ぎる椎名に対し音無は呆れた顔でつっこむ
マズいこのままだと椎名も別のチームに
そう悟った俺はこの雰囲気を打開するべく

「もちろん野球だよ！勝負っても個人成績で勝負しろよ　1対1で戦うな！」

「うむ…いいだろう…」

「俺は箒立てなくて良いんだな？」

「もちろん集中力の歴然たる差見せつけてやろう…」

俺の適当な説得で椎名を仲間にする事ができた…

「よし！決まりだ！」

「アホばかり増えますね！」
ユイの一言が痛いがまぁ気にせず次のメンバーなんだが…
主力メンバーを数えてみるとあいつしか残ってないような気がする…

「次は誰にすんだよ？」

「もう無理なんじゃね？」

「そうだよね！日向君アホだし」

「そうそう！先輩はアホですし」

バカップルにユイまで加わり俺を罵倒してくる　クソ！ホント最強のチームを何がなんでも作ってやる…

「仕方ないが…あいつしかいねぇな…」

「「「あいつ？」」」

みんなが顔を合わせる

俺らはあいつが居る河原へ向かった…そこには

「セイッ！ヤッ！タッ！ハーキエーーーーーッ！！」

「野田か…」

「野田かよ…」

「野田君か…」

「あの人ですか…」

「あいつか…」

みんな揃って露骨に嫌な顔をする　そんなに野田が嫌か？お前ら…

「しかしあいつを誘う奴はいねぇし…見てみろ長い棒振らせたら右にでる奴はいない　これは絶対戦力になるって……アホだけど……」

嫌がるみんなを引き連れ野田に交渉しに行く

「フッ…遂に来たか…決着の時がな！」

野田は音無にハルバートを向け勝負を挑んだが俺が二人の間に入り
　野田を言いくるめてやった…

「フッ…いいだろう…」
そう言い俺と野田はガッチリ握手をした

「アホだ…利用されてる事に気づいていない…」
ユイがいらん事言ったが今の俺は許す　何故なら後二人だ…　主力
メンバーで無くてもいい後二人でチームの完成…

のはずだった…
他の戦線メンバーが別のチームに取られてしまい　挙げ句の果てに
仲間同士で揉める始末…

ふと空を見るとあの日の光景が浮かび上がる……
「オイ！日向」
「！？」

音無の声で俺は我に戻る

「どうした？」
音無が心配そうな顔して聞いてくる

「いや…なんでもねぇ…仕方ないあとはＮＰＣで補うか…」

「ハイハーイ！だったらあたしに任して下さい！」

椎名に押さえられてるユイが言う　ユイの推薦だからあまり期待は

したくないが……予想通りだった
自称ユイファンクラブのミーハー女二人だった…　少しは予想を裏切れよ！
「仕方ないこれで明日は行くか！」
と言った途端九頭木が
「すまんが俺　野球知らねーだった…」
一瞬にして空気が凍りつく
「「「えーーーーーッ！！」」」
まさかだった　一番戦力になると思った九頭木がド素人だったなんて
「オイ九頭木どこまでだ…どこまで野球を知ってる？」
「球とバットぐらいしか…」お前はそれでも男子か！！と心の中でつっこんでみたり
「アホだった…この人もアホだった…」
「どうするの日向君？」
葉月までもが不安な顔をして聞いてくる　もうメンバー探すなんて出来ないし…
「仕方ない！明日までに俺がこいつに基礎だけでも叩き込んでやる！」
「そんなんで大丈夫か？」
「無理かもしんねー」
俺も音無も笑うしか出来なかった　そして九頭木の練習は夜遅くま

で続いた…

Ｅｐｉｓｏｄｅ：５　Ｄａｙ　ｇａｍｅ？（前書き）

お待たせしました　最近忙しかったんですが　何とか更新できました　もしかしたら　誤字がたくさんあるかもしれません

あと今回から誰視点かわかるようにｓｉｄｅをいれる事にしました

Episode:5 Day game?

side日向

球技大会当日

「フッフッフ…遂に来た……昨日のカミングアウトで日向に無理矢理　野球のルールを叩き込まれたがまだ若干うる覚えだ　しかし俺には秘密兵器がある……そうこの［初心者必見！猿でもわかる野球バイブル］がな！」

「おーい何やってんだ九頭木？置いてくぞ」

九頭木が何か語っていたが俺らは参加するべく大会本部へあいつを置いて行った　残った九頭木は一人落ち込んでいるようにみえた

√

「おー！我が戦線チームも順調に勝ち進んでますね！」

とユイの言うとおり死んだ世界戦線から［チーム高松］と［チームクライスト］は一回戦を見事に勝っている

「よし！俺らも行きますか～」

俺らは本部へ参加を求めに行く

「またか……どんどんチームが増えてくな…」

受付係りのNPCが嫌な顔をする無理もないだろう急に参加申し込みをするチームが来たのだから…しかも三回

「そう言いなよ～俺らだってここの生徒だぜ　ほらお前もお願いしろよ」
と俺は肘でユイをつき何か言えとふった
「本気でこいやゴラァー！」
拳を前に突き出しユイは見た目からは予想も出来ないセリフを吐いた…こいつ！
「ドス効かせてどうすんだよ！」
すかさず俺はユイに卍固めを決めてやる　昨日より強めのを…
「痛いです～ホームランが打てなくなります～」
「はなからそんな期待はしてねぇよ！」
痛さに悶え苦しむユイに更に絞めを強くしてやった
「仲良いな～お前ら」
龍之介がその光景を見て爽やか顔して言う
√
何とか参加する事ができた問題こっからだな
「よし！まずはここで勝たなきゃ罰ゲーム確定だからな慎重に行くぞ！」
「打順はどうするんだ？」
気合い十分の俺に音無は聞いてきた

「大丈夫！昨日徹夜で考えてきたんだ　まず一番音無」

「俺かよ！」

「待て！俺は！」

野田が音無を押しのけ俺に鋭い目つきで聞いてくる

「まぁ待て　二番が俺　椎名が三番　そしてお前が四番だ！　一番大切な位置なんだから頼んだぞ～」

「任せろ…」

「うわ～扱いやすい人…」

「五番がユイ　六番　九頭木　七番　葉月な　三回までに七点差つけたらゴールドだ！天使がくる前に片付けるぞ！行くぞファイトオーー！」

高らかに腕を上げて気合い入れをしたがみんなノラず俺の声が響いた…しかも少し遅れて音無やＮＰＣがノッてくれたがまたそれが虚しい…

「団結力が全くねぇ～な」

「日向君ってリーダー性も無いんだね龍ちゃん」

また二人の言葉が俺の心に刺さる

√ｓｉｄｅ龍之介

試合が始まった　先攻は俺ら日向チーム　まず一番の音無が打席につく

「何としてでも塁に出ろよ音無〜」
俺は音無にそんな声援を送ってやる　すると音無は「了解」と言う感じに右腕を軽く上げた

「プレイボール！」
主審の合図で試合が始まる相手のピッチャーが大きく振りかぶり投げた！
音無は初球から振り打ったレフト前ヒット

「ヨッシャー！」
「ヤッター！」
みんなが音無のヒットに喜んでいた時グラウンドに何か乱入してきた

「貴様の打球はそんなものか…？」
野田だ！　野田が音無が打った球をハルバートで打ち返した　もうみんなポカーンだ…　その挑発にノッた音無が返ってきた球を打ち野田とラリーをし始めた

「そんな競技は存在しねーよ！」

「アホですね…」
と日向とユイが二人につっこみを入れた　結果音無はアウトとなって帰ってきた…

「なぁ音無…尻か太ももどっちを叩かれたい？」
あまりのアホさに俺はバットをいつの間にか持っていた…

「マジすいません…」
「そう落ち込むなって！俺らが点取るって」
と日向が音無を慰める

「音無先輩ってアホですね！」
と笑いながら言ったユイに日向が「お前よりましだ！」とか言って制裁を加える

「チッ…役立たずが…」
ん！？俺の横にいる姫香がなんか酷いことを小声で言ったような…

「なぁ…姫　今なんか言った？」

「ううん！何も」

気のせいか…そして日向　椎名両者が塁に出て野田がホームランを打ち三点入れた　続くバッターのユイは三振になり遂に俺の番が来た

「一発デカいの決めてやれ」「ガンバレ～龍ちゃん！」

みんなが応援してくれる中俺はバッターボックスに立つ片手に［初心者必見！猿でもわかる野球バイブル］を持ちバッティングの基本のページを開く

「まず肩幅に足を開くと…こうかな？次に…」
「ストライク！バッターアウト！チェンジ」

「へ！？」
どうやら本に気を取られている内にアウトになってしまった…ベンチに帰るのが気まずい

「何やってんだよ！？お前！」帰って来た俺に日向が一言つっこみをいれる

「すいません…あのですねバッティングフォームに自信がなかっんで…決してわざとじゃないんですよ…ハイ……」
申し訳なささのあまり敬語で喋ってしまう俺

「カスが…」
「浅はかなり…」
「アホですね…」
「ホント…いろんな意味で驚かせてくれるぜ」
みんなが俺に罵声を浴びせポジションにつく
「ドンマイドンマイ！次頑張ろうよ！ねっ！」
姫香だけは違った　落ち込む俺を慰めてくれる
「ありがと～姫～」
その優しさに涙を流す俺

「だけど…」
「ん！？」姫香の声のトーンが一瞬変わった…
「次…ちゃんとやらないとお仕置（殺す）きだぞ！」
と笑顔で言い姫香もポジションにつく
「ハハッ…なぁ日向…今　姫が副音声で殺すって言った気がしたんだけど…」
あまりのショックで顔が引きつっているのが自分でもわかる…
「気のせいだろ…ハハッ…」日向も言葉では笑っているが顔は引きつっている

彼女の怖い一面を俺は知ってしまった…

Ｅｐｉｓｏｄｅ：５　Ｄａｙ　ｇａｍｅ？

ｓｉｄｅ龍之介

「いや～楽勝だったな～」
一回戦が終わり日向はそう言った

一回戦チーム日向は三回コールド勝ちを決めた　団結力は無くても個人個人の能力が高いのだった
例えば音無は日向のムチャブリでピッチャーになったが長打を出さず外野を守る俺は守備の時サボれた
まぁ悪い点と言えばキャッチャーの野田とチョイチョイ小競り合いがある事である

そして俺は知ってしまった…
俺の彼女である姫香が試合の間表向きはメンバーにフォローの言葉とかを言っているが副音声であの姫香が言うとは思えない罵声を浴びせていた…

「このまま優勝いけるんじゃね？」

「いや…そうもいかなさそうだぞ……」
俺がそんなことを言ってると音無が向こうの方を見ながら呟いた
音無が見ている方には天使を筆頭にその他諸々が俺らに歩み寄ってきた

「天使様の登場か…」
日向がバツが悪そうに言った

「あなた達のチームは参加登録していない…」
天使はいつものように顔色一つ変えずに言う　絶対コイツ賭け事強いぜ…

「あん？文句あんのか？ワレェ～殺ってやんぞ！」
と姫香が恐い顔して天使達に喧嘩を売る
もうコレなんか化学反応起きてるよね…

「おーい姫香頼むから戻ってこ～い」
俺は姫香の服の襟を掴み天使から離した

「あっ！？イケない　あたし勝負事になるとつい熱くなっちゃうんだ！」
いつもの笑顔に戻りそんな事を言う

「熱くなるって　完全に別の次元に行ってたわ！変な人格出てたぞ！！」
とは言えずに
「へ…へぇー…」
としか言えない俺がいた

戻って見るとまだ奴らは居た…
「どーも副会長の直井です　我々は生徒会チームを作りました　よってあなた達の関わるチームを正当な手段で排除していきます」
と副会長の直井とかいう奴がそうほざきやがった

「ってそっちは野球部のレギュラーじゃん…」

「正当って…無茶苦茶職権乱用してんじゃんかよ」
音無と日向がそうつっこんでいるとユイが奥の方から出て来て

「ハッ！頭洗ってまっとけよな！」
喧嘩を売った
「テメーは活躍してねぇクセによくそんな口がきけるな！あと洗うなら首だ！頭だったら衛星上の身だしなみだ！」
とユイにまた卍固めをかける日向
「お前も字間違ってんぞ…」音無が呆れながら言う

「あなた達と戦えることを楽しみにしてますよ…もっともあなた達と戦えるのは決勝でですが…せいぜい頑張って下さいね…」
そう吐き捨て直井達は去っていく

「腹が立つ～あんにゃろう　何としてでも決勝まで行って直井の鼻へし折ってやろうぜ！」
卍固めで手が離せない日向の代わりに俺が仕切った
みんなもなんか団結し始めた

√side日向

そして天使チームは宣言通りに俺ら戦線チームを倒して行く
俺らも負けじと決勝へ駒を進め　遂に決勝戦だ

「ここまで来てやったぜ」
試合前の挨拶で反対側にいる天使に挑発してやったが無表情でかわされた…
「チッ…かわいくねぇな　挑発の一つでもしてみれってんだ…」
そう俺は呟く

「なぁ日向…今回は今までみたいには行きそうにないし…守備位置変えた方が良くね…」

ベンチに戻ると音無が聞いてきた　（まあこいつも経験者じゃないのにここまで投げてくれたんだ　ピッチャーぐらい変えるか）そう思ったとき　突然九頭木が語り出した

「お前ら野球で一番大事なのは何だと思う？」

「何言ってんだお前　暑さで頭おかしくなったか？」

「浅はかなり…」

「遂にひなっち先輩のアホが感染しましたね」

ユイが下らない事を言ったのでほっぺをつねり上げた

「ひたひ！ひたひれふよ～」と上手く発音出来ずに痛がるユイを無視して九頭木の話に戻る

「野球に大事ってチームワークとかか？」

「チッチッチッ…全然違うぜ…」

何故かカッコつけだした九頭木　こいつにも技かけていいかな…？

「じゃあ何が大事なんだよ」

「そうだ！勿体ぶらさずに教えろ！」

音無と野田が答えを催促する

「それは…」

「「「それは…？」」」

みんなが唾をのむ

「フラグだ…大事なのはフラグだ！！」

「「「ハッ！？」」」
予想外の言葉にみんなが唖然とする

「山田くーん！九頭木の座布団とついでに色々と持って行って～」
と音無がらしくないボケをする
「いや！大喜利じゃないし！マジだから！」
全力でつっこむ九頭木

「なんでフラグなの？」
葉月が九頭木に質問を投げかけた
「そりゃよくスポ根マンガであるじゃん　それを取り込めば奇跡が起きて試合が楽になるんじゃないかと思って」

アホだこいつ…頭のネジもしかしたらユイより抜けてるかもしれん

「んなわ「いや！あり得るかも知れないぞ」
と否定しようとしたらまさかの音無が九頭木の案に賛成と乗り出してきた

「そうだね…作戦がないよりかましだからね！」

「そんなのが無くても俺はやれるが…今回だけだぞ」

「貴様のその奇策ノッた…」

みんなが次々に賛成していく　おいおい良いのかそんなんで…
「ホント…先輩のアホが感染しているんじゃ…」
「かもな…」
冷静に事を見ているユイに俺は同意した

「よし！バンバンフラグ立てまくって奇跡を起こすぞ！」

「「「おーーーーーーッ！」」」

駄目だこりゃ…

Ｅｐｉｓｏｄｅ：５　Ｄａｙ　ｇａｍｅ？

ｓｉｄｅ龍之介

フラグ立てまくりで勝利はもらった作戦を実行した俺ら　一回表の俺らの攻撃　一番の音無がバッターボックスに立つ

「よし！フラグ立てるぞ～！」

「おーーーーーーッ！」

「その前になんだその作戦名…」

フラグその１ｓｉｄｅ日向

「よし！音無頼んだぞ」

「テメーの根性見せたらんかいゴラァ！」

みんなが音無を応援する　つーか葉月のキャラが崩壊し過ぎなのを誰もつっこまないのが不思議だ…

「実は…音無が体格良いのにあまり長打が出無いのには理由があったんだ…」

と突然九頭木が喋り始めた　（いきなりフラグ立てに来た…）

「何だよその理由は…」

仕方なくのる俺　すると九頭木の顔が暗くなり

「あいつ…全力出すと二度とスポーツの出来ない体になってしまうんだ…」

すると音無がタイムを取り戻って来て一言
「んなわけねーだろ！変なフラグ立てるなー！」
「いやだって…奇跡を起こすフラグだぜ！」
「その後病院送りのフラグでもあるわ！しかも序盤に使うフラグでもないしもっと別のフラグ使えー！」
一通りツッコミ音無はバッターボックスへ戻る　結果はヒットだった

フラグその2

その後いつものように俺　椎名でヒット打ち野田で走者を返し4点を入れた…
九頭木のフラグはと言うと使えない物ばかりで…特に俺の時の
『恋愛フラグを立てて奇跡を起こせ　と言うことでユイか椎名に告白しろ！』と言われた時はバットで殴りそうになった…

「ストライク！バッターアウト」
ユイは呆気なくストライクを取られ戻って来た

「だからフラグ立てろ言っただろ」

「あんなフラグ立てれるかボケェ！」
九頭木にブチギレるユイ
「九頭木～なるべくツーベース以上を頼んだぞ！」
ド素人ではあるが当たるとよく飛ばす九頭木　今までよく長打を出していた…

「まかせろ！あんなヘボピー簡単に打ち取ってやるぜ！」

と自信満々に打席に立つ九頭木

「あれってさぁー…」

「あれの部類に入るよな…」そうあのセリフは…

「ストライク！バッターアウト！」

とぼとぼ戻ってきた九頭木みんな冷めた目であいつを見てた

「負けフラグたたせやがって…葉月が後でしばくって言ってたぞ頑張れよ！」

「うあぁぁぁ！イヤだぁぁぁ！」

音無の言葉にそう叫ぶ九頭木　自業自得だな！

フラグその３ｓｉｄｅ龍之介

一回表俺らは４点しか入れれず　しかも人格が変わった姫香にしばかれた…

天使チームの攻撃　相手は野球チームだけあって音無の球を軽々外野に運ぶしかも弱点であるライトとレフトを狙って…

点差も一点に縮められてしまい野田が悔しそうにしていた　あれ姫香さん指鳴らしてなんでこっち睨むの？

「タイム！」

日向がそう言い音無の所へ寄るしばらくすると音無が

「ポジションチェンジ！九頭木交代だ！」

「アーーーーーーーッ！？」

すぐさま音無達の所へ抗議しに行く

「何故？何故交代なんだよ！俺の何が悪かった？」

「いや…お前は悪くないんだがここでのポジションチェンジは勝ちフラグだからよ…」

「それだけで俺リストラーーッ！！」

音無の言葉がやたら重かった

「でも音無チェンジたって誰が変わるんだよ？」

（そうだ！変わる奴がいないじゃないか）

そう思い安堵する俺

「心配すんな…ほら！あそこ」

「「ん？」」

俺と日向はセンター見てみるとそこには松下五段がいた

「「えーーーーーーッ！！なんで五段がいるんだよ！？」」

うまい具合にハモった俺ら確か五段は竹山チームにいたはず

「肉うどんの食券余ってたからあげたんだよ」

「お前かー！よくやった五段は食べ物の恩は忘れねぇこれで守備も完璧だ！」

と日向は手頃な位置にいたユイに卍固めをかけながら言った

俺からしたら余計なお世話なんだが…

「大丈夫！龍ちゃんの分まで頑張るから」

「姫香…」

優しい言葉をかけてくれる姫香　しかし副音声で
「使えない人はただの生ゴミ…」
と言っていた　それに俺は言葉を失い　ベンチに帰ることにした…
五段が守備に入ってからはあまり失点を出さずにいた俺もＤＨとして攻撃に加わった
そして九回裏　７－６ツーアウト　ランナー二三塁　まで来た

Ｅｐｉｓｏｄｅ：５　Ｄａｙ　ｇａｍｅ？（前書き）

長かったＥｐｉｓｏｄｅ：５もこれが最終章です

Episode：5　Day　game？

side日向
勝てるかもしれない…最終回　一点差　ランナー二三塁……あれ…
これって……

side音無
クソ…ここで抑えたら勝ちなんだが…

「タイム！」
俺はそう言いチームのリーダーである日向にピッチャー交代を頼んだ

「遂に俺の出番か～」
「どっからわいてきた…てかお前に任したら負けフラグ成立だ！」
ベンチにいた九頭木が急に俺の横に現れふざけた事をぬかしたので
俺は「スパーン！」とグローブで叩いた

「おい…どうした日向？」
俺と九頭木の小競り合いにも全く気にも留めずどこか上の空だった
俺の呼びかけでやっと日向は気付た

「どーしたんだよ？まさかビビってる～？」

「いや…なんかさ　昔似たような事があってさ…すげー大事な試合
だっんだよ…」
九頭木の茶々を気にもせず暗い面持ちで日向が喋り出した　これに
は九頭木も真面目な顔で聞いていた

「お前…震えているのか？」よく見ると日向の体が小刻みに震えていた

「そうかぁ？ハハ…変だな…」
明るく返しているが顔は笑っていない…

「昔…何があったんだ…」
九頭木の日向に問いかけた

「分かんねえ…よく覚えてないんだわ…俺　野球部でさ…甲子園目指してでさ…死にそうに暑くて　口ん中泥の味しかなくて…そう言いのは覚えてんだ……最後の地方大会の最終回　ツーアウトでランナーが二三塁にいてさ…感嘆なセカンドフライが上がったんだ…ほぼ定位置…ただそれを捕れたのか落としたのかどうしても思い出せないんだ…」

「「……」」
日向の話に黙るしかない俺ら…

「いや捕れてたら忘れるはずないよな…きっと捕れなかったんだ…」
日向が話を聞き何故か岩沢が頭の中に出てきた…

ｓｉｄｅ龍之介

日向の話を聞いたときからまた嫌な感じが体中を這いずり回る気がした…まるで岩沢の時と同じ様に
まさか日向は
「お前…消えるのか？」

「えっ！？」

「お前…この試合勝ったら消えるのか？」
音無も俺と同じ事を考えていたらしい…日向は少し驚いていた…

「えっ！？…あっ…き…消えねぇよ…変なフラグ立てるなよ…こんな事で消えてたまるかよ…」
音無の言葉を冗談と思っている日向
結局ピッチャー交代せず　そのまま再開する事にした
「音無…何が何でも打ち取れ！絶対にだ！」
マウンドへ帰ろうとする音無に小さな声で伝えた
音無も「了解」と返し俺はベンチへ戻る

試合が再開され　音無は第一球大きく振りかぶって投げたが「カキーン」という金属音と共にボールは飛ぶ
打球は弧を描き日向の元へ進んでいる
そうセカンドフライだった
「クソ…日向ぁぁぁ！」
ベンチから俺は急いで日向の元へ行く　音無もマウンドから日向の元へ駆け寄る

「…うわっ！？」
俺は地面に躓き転んでしまった…　音無も間に合わない

（クソー！捕るな！！日向ぁぁぁ！）
地面を叩いて悔しがる俺すると何かが日向に猛スピードで近づく…

ｓｉｄｅ日向

音無の球は虚しく打たれ俺の元へくる
（セカンドフライ！？　コイツを捕れば終わるのか　そいつは…最高に気持ちがいいな…あの時みたいにはしない絶対捕ってやる！）
そう思いながら近づいてくる球にグローブをしっかり構えて待つ

（あともう少し…これで…）
「隙ありーーーーーー！」
そんな声が聞こえた瞬間俺は背中を蹴り飛ばされ倒れ込まされた
そして俺の顎を掴まれキャメルクラッチを決められる
誰だ…？こんな事をするのは？
「この…よくも卍固めしくさってくれたな！この！この！！」

（この声ユイか！こいつ～）
「テメー！何でこんな時にキレてんだ！！」
キャメルクラッチを振りほどきスリーパーで仕返す
タップをして謝るユイだがこれだけは許せない

「このー死ね！死ね！！死ねぇー！！」

ｓｉｄｅ龍之介

彗星のごとく現れたユイにより日向の消滅は免れた…俺と音無は安心して微笑みがこぼれたが
結局試合は負けてしまい…野田と姫香が尋常じゃないほど悔しがっていた…

この後敗因の日向とユイそして役に立たなかった俺はゆりから［死よりも恐ろしい罰ゲーム］を受けることを今はまだ知らなかった…

Ｅｐｉｓｏｄｅ：５　Ｄａｙ　ｇａｍｅ？（後書き）

次回予告

「なんだ…これは……」

「気をつけろ…あれは…殺戮兵器だ…」

「この事態を止めれるのはあなたしかいないの…」

「これで…出来上がり」

「大山ぁぁぁ！？」

「生きててすいません生きててすいません生きててすいません」

「俺なんてまだまだしだ…」

「絶望した！」

「やってやる…俺が止めてやる！」

Ｅｐｉｓｏｄｅ：６　Ｌｉｋｅ　Ｎｉｇｈｔｍａｒｅ

Episode:6 Like Nightmare?

side???

「フフ…仕上げにこれを加えて……これで出来上がり」

side龍之介

「あ～クソッ！まだ耳に残ってら～」
俺はする事も無く暇なので姫香を探すついでにぶらぶら散歩をしている

えっ！？何が耳に残っているって？　それは先日行われた球技大会で天使チームに負けた原因の日向　ユイ　あまり役に立たなかった俺は［死よりも恐ろしい罰ゲーム］を受けたのだった

罰ゲームの内容はイヤホンから流れる黒板を爪や釘で引っ掻く音を大音量で五時間聞く物だった　その音がまだ脳内でリフレインしているのだった
髪の毛をガシガシとかきながら歩いていくと

「なんだ…これ……」
廊下を見るとそこには日向とユイが倒れていた　日向は壁に寄りかかり　ユイは床にうつ伏せになって倒れていた

「おい…日向どうした？また喧嘩か？」
日向に駆け寄り足で突いてみた

「……あっ……九頭木か……」
日向は虚ろな目でこっちを見た
「おいマジでどうした？顔色も悪いぞ」
「やられた…」
「誰に？」
「葉月に…」
「どうして？」
「わからない…」
「じゃあ何されたんだ？」
「料理を食わされた…」
という感じに俺と日向の一問一答が繰り返された……って料理！？
「はぁ！？待て！！料理ってあいつの手料理か？」
問いただすと日向は小さく頷く
「おいー！！何彼氏より先に彼女の手料理食ってんだコノヤローッ！！」
日向への心配などすっかり無くなり嫉妬の二文字が浮かび上がる
「へっ…そんな甘いもんじゃないぜ…」
「はぁ…どう言う意味だよそれ…？」
全く話が読めない
「あいつの料理は壊滅的だ…俺もユイもあれにやられた……あれはもう塩と砂糖を間違えたとかの下手さじゃねぇ…」
その言葉に俺は唾を飲んだ…

「俺なんてまだまだ…ユイは試作品一号目を食べてあの様だ…」
ユイを指差し話す日向
「気をつけろ…あれは…殺戮兵器だ…」

「どうしてだ…？どうしてあいつはこんな事…」
俺は日向を揺すり訳を聞く
「あいつ…は……」
途中で日向は息絶えた
呆然と立っている俺　いきなり過ぎて頭が混乱している
すると
『九頭木君…聞こえる？……聞こえたら返事をして…』
ポケットに入れてる天使エリア侵入作戦の時貰ったインカムからゆりの声がした
「おい！ゆり大変だ！！日向が」

「ええ遊佐から報告が来てるわ…日向君以外にも被害は出てるわ…それより聞いて音無君たちに彼女を止めるために徘徊してもらっているの…あなたもそちらに加勢して貰うわ」

「了解…その前に何で姫香はこんな事をしてんだ…」
「たぶんだけど彼女は彼氏のあなたに自分の料理を食べて貰いたくて味見係にあたしたちを使っているそう考えるのが一番妥当ね…」

「マジかよ…あのなんかウチの姫香が迷惑かけてすいません…」
俺は一応謝っておく

「本当よ…けどこの事態を止めれるのはあなたしかいないの…頼んだわよ」

と言い無線が切れた…

事を整理すると
姫香は俺に料理を食べて貰いたい
←
味見係に戦線メンバーを利用
←
戦線はこれ以上被害を出さないために阻止使用としている
←
そして俺は被害が増える前に姫香の料理を食べれば良い
と言う事になる

俺は目の前に転がっている二人をそのままにし　小走りで姫香を探しに出た

「出来れば食べたくないな…」

Ｅｐｉｓｏｄｅ：６　Ｌｉｋｅ　Ｎｉｇｈｔｍａｒｅ？（後書き）

作者の自分が言うのも何ですが…
自分はヒロインをどの方向へ持って行くつもりなんだ！

Episode:6 Like Nightmare?（前書き）

お待たせしました
やっと最新話更新できました
夏の暑さと忙しさから筆が進まないのなんの…
ではお楽しみください

Episode:6 Like Nighthmare?

side龍之介

「やっと着いた…調理実習室」
俺は調理実習室の扉の前に立つ　扉の隙間から異様な匂いが漂ってきた…
俺は生唾を飲み込み扉を開ける
あぁここまで来るのに苦労した…
振り返ること三十分前

三十分前

ゆりから姫香の料理（殺戮兵器）を食べるように言われ重い足取りで調理実習室へ向かう
ここから調理実習室までは別の棟の三階だが歩いて十分程度の距離
　そう遠くはない
急いで調理実習室に向かっていると向こうに人影が見えた
あれは大山だ

「おーい大山！」
声をかけて近づくが大山は気づかないので肩を軽く叩いた
すると大山が振り返ったとたん俺にアッパーをくり出してきた
その拳は見事あごに入り俺は尻もちをついた

「大山ぁぁぁ！？」
まさかの出来事に驚くことしか出来ずにいた

「おいテメー　誰に口聞いてんだ…」
明らかいつもの感じでは無かった

「誰って…大山しかいないだろ…」
「だよなぁ～　そんでもって俺はお前よりこの世界は長いんだよ！言わば先輩なんだよ！敬語を使うのが普通だろあぁ～」
俺の前髪を掴みすんごい至近距離で説教が始まった

「なんか言ったらどうなんだ！口が無いのかぁぁぁ！？」

「いや…あります　本当すいませんでした以後気をつけます…大山…先輩…」
あまりの恐怖で敬語になってしまった
よく見ると大山の口の周りに何か食べカスが付いていた……まさか…

「けっ…解りゃ良いんだよ…解りゃ」
と言い大山はその場を去っていく数秒後ドサッという音を立てて大山が倒れた

「大山ぁぁぁ」
急いで駆け寄ると既に息がなかった…そうこいつも姫香の餌食に…

「温厚な大山をあそこまで豹変させるなんて…」
兎に角あいつの料理のヤバさが心底伝わった

再び調理実習室へ行く事にした

自販機が並んでいる渡り廊下を走っていると自販機の横に何かいた
通り過ぎた俺は戻って見てみると体育座りをして何か呟いている野

田がいた…多分こいつも餌食になったんだな
「野田か…」
野田たったので無視してその場を去ろうとしたら
「俺みたいなのが生きてるなんて…目立つ武器を持っているのに活躍できないないし新入りに遅れをとる始末…もぅ九頭木さんなんて神に等しい存在だし…」
なんて野田が呟いている　気がよくなった俺は野田の呟きを聞くことにした…別に自分が誉められたからもっとその言葉が聞きたいからじゃないから…面白いから聞いているんだから…いやホントに…
しかし
「生きててすいません生きててすいません生きててすいません」としか野田は呟かなくなったつまり末期症状に突入したわけだ…
飽きた俺はまた足を進める俺が去った後　野田は大量の血を吐いて死んだことを知ることはなかった…

ようやく調理実習室がある棟へ着き三階を目指す
後は飯食って死んで終わりと言う決められたシナリオを着々と終わりへ向かっていた

しかし
二階に着いた時目の前に音無が外を眺め黄昏ていた…今までの流れからするとこいつも餌食になりーの人格変わりーの死となる　絶対に！

「あっ！九頭木」
音無が気づいて近づきた
今の所は普通だが…

「聞いてよ～カツーンの赤東くん脱退するんだってマジあり得なくな～い」
ハイ　キター（・∀・）ー！！
真面目な音無がオネェになってカツーンついて話し始めたよ

「ホントも～絶望した！」
あまりの気持ち悪さに俺は廊下から下へ音無を落とした
「さっきのは疲れからきた幻覚だ！気にするな俺！」
自分に暗示をかけて三階に行く

とまぁここまでが調理実習室に来るまでの道のりだった

Episode:6 Like Nightmare?（前書き）

また投稿するのに一週間かかってしまいました…

Episode：6　Like　Nightmare？

side龍之介

扉を開けた途端紫色の煙が異臭と共にやって来た
（ウワッ！何だこの臭い！！マジで殺戮兵器だな…）

手で口と鼻を押さえ奥へ進むとコンロで鍋を混ぜている姫香の姿が見えた

「オイ姫香！」
「ひゃわッ！？りゅッ龍ちゃん！？」
真剣に鍋を混ぜていた姫香は俺の呼びかけに大きく驚いていた…ッーか何でコイツこんな中普通にいれんだよ？

「ビックリしたなもぉ～！」
頬をプーと膨らませる姫香に俺は膨らんだ姫香の頬を軽くつねり引っぱった
「ビックリしたじゃねぇよ…料理なんて急に作り出して？」

「サプライズで龍ちゃんに秘密にしてたんだよ～　もうみんなお喋りなんだから～」
（その後みんな散っていったがな！！）
そんなのほほんとした姫香に心の中だけで俺はつっこむ

「まぁ良かったよ！丁度納得できる味になって龍ちゃん呼ぶところだったし　手間が省けたよ～」
姫香はお玉で鍋の中のスープを皿に盛り俺に渡した……
「あの～姫香…これなに？」

「シチューだよ！クリームシチュー！」
と言われたクリームシチューは色々とツッコミ所満載だったまず色！
クリームシチューは普通白色だろ！！しかし俺の目の前にあるのは
銀色に輝くスープ

「これ…なに入れた？」
「ん～まずメチル水銀！」
有害物質キター（・∀・）ー！！ホント日向の言うとおり塩と砂糖
間違えたの次元を超えている　水銀って銀だよ！金属だよ！水って
付いてるけど食べれないよ！過去に人に害与えまくっているよ！！
と口に出して言いたいのだが…言えない　言ったら殺される

そのほかに聞いたことのない薬品の名前があったがシチューに使わ
れる材料は聞こえてこなかった

「ホントに旨いのか…これ？」
「大丈夫だよ！見た目はアレだけど味は太鼓判つきだから」
と言い姫香は一口食べた…がなんともなかった
もう味覚音痴とかじゃなく体が色々とおかしいんし〝ゃないか…

「ほら！あ～ん」
と姫香がスプーンにシチューをすくい俺の口に近づける
普通なら女の子にあ～んをされたら喜ぶのだが無理だしかしここで
食べなかったらこいつは悲しむだろうな……クソ！毒なんか愛で浄
化してやる

俺はパクッと食べた
この口に広がる風味
濃厚な味わい
そしてこのアクセント

一言で表すなら…

［不味い！！］

「ねぇどう美味しい？」
少し不安げな顔して聞いてきた
モチロン本当の事を言うのがこいつのためだが…すると俺の目線は
姫香の手に釘付けとなった
姫香の手は絆創膏や包帯だらけだった
こんなになりながらも俺のために…

「あ…ああ美味しい…よ！」
と嘘をいってしまった…
まぁ今度からは辛口に採点してやろう
姫香の喜ぶ顔を見ていたら味なんてどうでもよくなりいつの間にか
一皿平らげていた

「あっ！龍ちゃんおかわりはいっぱいあるから沢山おかわりしてね
！」
「はっ！？」

見るとラーメン屋で仕込みに使うような特大の鍋いっぱいにシチュ
ーが入っていた

はは…いくら何でもコレは無いでしょ…

結局全部食わされてしまった　そして食い終わった後の記憶がポッ
カリ空いてしまい意識が戻ったらなんか戦線メンバーに好奇の目で

見られていた
その事について誰も俺に話してくれなかった…

Ｅｐｉｓｏｄｅ：６　Ｌｉｋｅ　Ｎｉｇｈｔｍａｒｅ？（後書き）

次回予告

「テストだとー！？」

「辞退を！」

「俺の実力見せてやるよ」

「きゃーっ一番よ！」

「なんだありゃぁぁぁぁぁぁ」

「物理のテストですが…」

「こっちを見るなぁぁ」

「ドンマイドンマイ」

「そんなささやかな幸せまで奪っちまった…俺…」

Ｅｐｉｓｏｄｅ：７　Ｆａｖｏｒｉｔｅ　Ｆｌａｖｏｒ

Ｅｐｉｓｏｄｅ：７　Ｆａｖｏｒｉｔｅ　Ｆｌａｖｅｒ？

ｓｉｄｅ音無
「遂にこの時がやって来たか…」
ゆりがいきなり暗い面持ちで窓を見ながら喋りはじめた

「なんだ…何か始まるのか？」
俺は訳が分からないので質問してみる

「天使の猛攻が始まる…」
「なんだ天使の猛攻かよ……」
とゆりの言葉に九頭木はバカみたいに明るかった……って

「「猛攻！？」」
見事にこいつとハモってしまった…
［天使の猛攻］と言う言葉に俺は沢山の天使が戦線と戦っている姿が思い浮かぶ
一回唾を飲み恐る恐る理由を聞いてみる
「猛攻ってどうしてなんだ？」
するとゆりは窓を見たまま
「テストが近いから…」
「あー何故？」
予想以上にショボい理由に馬鹿らしくなってきた…

「考えれば分かるでしょう　授業を受けさせることも大事ですがテスト受けさせ良い点を取らせる事これも大事なのです…天使にとっては」
と高松がメガネを上げながら説明してきた…てかそんなにずれるなら締め直せよメガネ

「テストだとー！？」
「あら九頭木君どうしたの？いつものあなたらしくないわよ…」
ゆりの言うとおり九頭木が小刻みに震えながら叫んでいた…

「どうしてもダメなんだよ…テストとカリフラワーが」
みんなどうでもいい顔をしているがそんなのお構いなしに九頭木は語り出す

「閉鎖された空間　誰一人として喋らない五十分間　教師たちの鋭い眼光　あんな空間で問題解いてた発狂物だ！」
熱く語る九頭木に呆れながらゆりが口を開いた
「ハイハイみんな彼は無視しましょ！話を戻すけどこのテスト期間　私達にとって厳しい物だけど逆に天使を陥れる大きなチャンスとなり得るかもしれない」

「何か思いついたみたいだなゆりっぺ　聞かせてもらうぜぇ」

「天使のテストの邪魔を徹底的に行い赤点を取らせまくる　そして校内順位最下位に突き落とす！」
「それが何になるの？」
作戦の主旨が分からない大山がゆりに聞いてきた

「名誉の失墜…生徒会長として彼女は威厳を保てなくなるわ」
「それで弱くなると？」
「さぁ？少なくとも教師や一般生徒の見る目が変わるわ　その行いには今まで無かったような変化が生じるわ」
「どんな？」
「さぁ？そこまでは私にも分からないわ」

ゆりはメンバー達の疑問を適当に答え　部屋を暗くするように命令し作戦内容を説明しだした

「まずは今回の作戦メンバーを決める！天使のクラスでテストを受ける手回しは既に完了しているわ」

「んじゃあメンバー全員で固めちまえば良いんじゃねぇか」

「［じゃねぇか］じゃ無いわよ！！ミスは許されないのよ作戦が途中でバレたらすぐにも別の教室に飛ばされて天使に赤点を取らせる細工が出来なくなるのよ」

とゆりが藤巻の発言に喝を入れた…つか最初のあれって藤巻の真似？

「ほぅ…なら俺はパスだ！そんなのは女々しい奴らの出番だ」

と野田が辞退を申し出た　多分辞退しなくてもこいつは呼ばれないと思う　だって馬鹿だから…

「そこで今回のメンバーは高松君！日向君！大山君！姫香ちゃん！竹山君！九頭木君！音無君！」

ゆりからメンバーの発表がされた…って

「また俺かよ…」

「僕のことはクライストと「なんでよりによって俺なんだよ！」

竹山が懲りずにアピールをするが九頭木の声でかき消されてしまった…

「見た目が普通の奴らを選んだだけよ」

さらりと受け流すゆり

てかみんなもなんで怒らないのか遠回しに変人と言われたのに…

「だったらボーナスの1つ位暮れたっていいじゃんかよ！こちとら命懸けなんだからよ…」

九頭木はゆりに抗議する　ある意味度胸あるな…こいつ
「ええ良いわよ…ただし金じゃなくて鉛だけど」
とゆりが銃を構えて微笑むこれには九頭木もマジ勘弁といった感じで首を横に振ってた…

「あれ葉月は？」
「あっ！ホントだいない」
日向が葉月がいない事に気づいてみんなが辺りを探すがゆりは驚きもせずに

「彼女なら陽動のミーティングに行って貰っているわ　とにかく！オペレーションスタート！！」
と開始の音頭を取った

Episode：7　Favorite　Flaver？（後書き）

毎度呼んでいただきありがとうございます

初心者なので読みにくいかもしれません

もしよかったらアドバイスなど頂けたら嬉しいです

Ｅｐｉｓｏｄｅ：７　Ｆａｖｏｒｉｔｅ　Ｆｌａｖｏｒ？

ｓｉｄｅ龍之介

テスト初日俺は出たくもないテストに無理矢理参加させられた
そしてゆりが黒板に張り出された座席表を睨む

「席はその朝くじ引きで決まる…これで天使の近くでなければ細工がいっきに困難になるわ…」

「くじで席を決めるなんて適当すぎるだろこの学校…普通出席番号順だろ」
少なくとも俺の学校はそうだった

「いいこと！天使の席の前を引き当てなさい！」
「おいそれはなんでも無茶すぎるだろ！」
すぐに音無のツッコミが入った…それはそうだ前座席数４０の内１つの席を狙うなんて本当に無茶すぎる

みんな渋々くじを引いていくが日向　大山　高松　俺　音無はハズレだったそしてゆりがくじを引く

「きゃーっ一番よ！」
と黄色い声を上げ喜ぶゆりしかし急に手に持った紙を地面に叩きつけ踏みつける「何が一番よこの！この！く～近くに誰かいないの！！横でも後ろでもいいから！」

「ヤケクソになっているな…」
「ジ●イアンかよ…」
俺と日向はゆりに聞こえないように話した

「一つ前です…」
「私は隣だよ！！」
竹山と姫香が当たりを引いたみたいだ

「よっしゃーーッ！！」
ゆりが大きくガッツポーズを取った
そしてゆりの席で作戦会議が行われた
「まず答案用紙が配られるときに二枚持っておきなさい　で一方を天使のとすり替える　そっちの答案用紙に…白紙…いや駄目ね不自然に思われるわ　まぁバカみたいな答えを並べて置いて」

「と言われましても…」
ゆりの無茶ぶりに不満がこぼれる竹山

「上から順に将来なりたいものでも書いてなさい！」
「「「死んでるのにかよ！！」」」
俺と音無と日向のハモりツッコミが炸裂する

「物理のテストですが…」
呆れてれる竹山　これは無茶ぶりにも酷い所だろ

「良いじゃない飛行機のパイロットとか～イルカの飼育員とか～お嫁さんとか～ウルト●マンとか～」

「うわ～アホすぎる…」
「何歳児の将来の夢だよ…」
やけにテンションを上げながらはゆりが出していく例えにみんな呆れる

「では回収の時はどうすれば？」
高松がメガネをかけ直しながら聞いた

「回収の時は横に居る姫香ちゃんに天使と話して貰うわ…でもって日向君！！」
急に日向を指差し
「回収のさい何かアクションを取って貰うわ　クラス全員が注目する何かをね！と言うことでヨロシク！！」
「了解であります！」
「イヤイヤちょっと待てぇぇい！！」
ゆりの命令に姫香は快く受け入れたが日向は完璧と言っても過言ではないツッコミをした

「何でそんな事しなきゃあなんねぇんだよ！！訳わかんねぇよ！！」
「あら？あなたはこの為に入れたのよ　それ以外有り得ないじゃない」

「うぇぇ！？まさかそんな道化師役とは…」
まさかの起用方法に落ち込む日向

「あっ！？待ってください！名前はなんと書けば？」
竹山が一番重大な事に気付いたが誰も何も言わない…変な空気が漂っている…
「天使…？」
高松がこの空気を打破すべく口を開いた
「天使　花子さん？」
続いて姫香を喋る
「いや…姫それは適当過ぎるだろ…住民票の名前記入例じゃないんだから…」

「例えが分かり難いわ！！つーか天使では無いだろ！生徒会長で通るだろ？」
日向はツッコミを入れそして最もらしい答えを出した
「そうだよね～イルカの飼育員さんとか書くぐらい馬鹿なんだから」
「イヤイヤ自分の名前も書けなきゃアホすぎるだろ！つーかお前らが名前知らなかったって事に驚きだよ！」
納得しているみんなに音無はツッコミを入れずにはいられなかった
「仕方ないじゃない聞く機会なんて無かったんだから…そんなに気になるなら職員室行って名簿でも何でも見て調べれば良いじゃない！」
ゆりは面倒くさそうに言い音無に調べに行かせた…
すると出入り口付近で音無は天使に止められなんか話している
ふとゆりの方を見るとなんかつまらなさそうな顔をしている

「立華　奏だった」
戻って来た音無が天使の名前を教えてくれた

「ああそんな名前だったわね…」
ゆりはそっぽを向いて音無に冷たく返す
「知ってたのかよ！！」
「忘れてただけよ…」
なんかゆりの機嫌がナナメだ　すると姫香がこっそり俺に耳打ちをしてきた
「ゆりちゃん二人が話していた事にジェラートしてたのかな？」
ジェラート？何でイタリアのアイスクリームが出てきた？
「…ああ！それを言うならジェラシーだ　つかそれは無いだろ…」
俺は姫香のおバカ答えを訂正してやった
「オイお前らテスト始めるぞ～！席つけ～！」

教師が入ってきた
最後にゆりが一言

「いいこと想定外の事が起きても慌てずみんなでフォローしあって行きましょ！！」

席につきテストが開始された

Episode:7 Favorite Flavor?（後書き）

ご愛読ありがとうございます！

感想とか待ってます

Episode:7 Favorite Flavor?（前書き）

読者のみなさま
更新が非常に遅くなって本当にすいません
これからもヨロシクお願いします

Episode:7 Favorite Flavor?

side龍之介
一時限目　物理
「わからん！」
テスト開始から三十分が過ぎていた　しかし答案用紙は真っ白のままだった

「くそー天使って理系かよ！！　文系の俺に出来るか！！」そんな独り言を呟いていると見回りに来た教師に咳払いと言う名の注意をされた

チャイムが鳴り教師が終了の合図を出した途端　今まで静かだった教室が嘘のように話し声でいっぱいになった

後ろから答案用紙が回ってきた　天使の方を見ると姫が一生懸命話しかけているのガン無視だ…すると急に
「なんだありゃぁぁぁぁぁぁグラウンドから超巨大な竹ノ子がにょっきにょきとぉぉぉぉ！！」
と校庭を指差し大声を出しながら立ち上がるが誰一人反応しない

「アホ日向…」
音無が呟き　日向は悔しそうに席に着いた数秒後日向の椅子が青い光を放ちながら日向ごと上へ上がった
日向は天井に激突しそのまま崩れ落ちた…

「あなたが失敗したときのために椅子の下に推進エンジンを積んでおいたの～どうだった？ちょっとした宇宙飛行士気分は」

文句を言いに来た日向に爽やかな笑顔で返したゆり
「一瞬で激突して落下したよ！！つか良く推進エンジンなんて造れたな！！」
「フォローしてあげたんだから感謝しなさい」
謝るどころかお礼を要求してきやがったぞこの女…

これ以上日向は何も言わなかった

「とりあえず作戦成功ね竹山君！」
「抜かりありません！あとクライス「じゃあ次高松君！」
竹山の話に割り込みゆりは不気味な笑みを浮かべながら高松を指名した

「な…何でしょうか？」
その笑みに高松の声は震えていた
「何って次はあなたがみんなの気を引く何かをする番よ」

「それは日向さんの役目では！！？」
どうしてもやりたくない高松は日向を口実に逃げようとするがゆりの［オオカミ少年］の話を使いうまく言いくるめた

「無駄なあがきはよせ…そしていざぎよく飛んでこい高まっチャン！！」
「あぁそうだ！お前ならきっとうまく飛べるさ高まっチャン！！」
他人事の俺と日向は困惑する高松の肩に手を置く

「ところで次の科目ですが？」
「あ～～ぁ　いいよなお前はテストに細工するだけで良いからよ～」
と日向のこの発言が事の始まりだった

この事にカチンときた竹山は日向を遠回しにアホと言い　何故か高松も言い合いに参戦し三人が喧嘩を始めた
最初は無視をしていたようだが鬱陶しくなったのかだんだん顔が険しくなり

「くぉらーーーー！！てめーら喧嘩すんじゃねー！！」
キレた　大声を出しキレた教室中は沈黙に覆われ
天使が席から立つ時に椅子と床がこすれる音がはっきり聞こえた

「ヤバッ！？」
と咄嗟にゆりは顔を隠す
「どうする？リーダー　このままだと　教室から追い出されるぜ」
俺が冷やかし気味に言うと「日向君何とかしなさいよ！！これは命令よ！」

「あぁ！？何で俺がぁ～？やだよ！」
日向は嫌がるが
「元はと言えば日向さんが竹山さんに余計な事を言うからです」
「そうですよ！因みに僕の事はｋ「何とかしなよ日向君！」
みんなで日向に行かせるように煽るが
「いや…もぉ大丈夫みたいだよ　ホラッ！！」
姫が指差す方を見ると
音無がうまく誤魔化してくれたみたいだった

「おまえ等なぁ…」
呆れながら音無が帰ってくると
まだ日向とゆりの言い合いが終わっておらずこれには流石の音無も
「いい加減にしろよ…」

静かにキレた…

「まぁ次は世界史よ　答案にはそうね……手塚●虫のキャラクターでも書いてなさい　と言うことで引き続きヨロシク！！」

と強引に納めたゆりの言葉でみんなは持ち場へと帰るただ高松は頭を抱えていたきっとみんなの気を引く何かを必死で考えているのだろう

…ってその役割って俺も回ってくるじゃん

今のうちに考えるか…

Episode：7　Favorite　Flavor？（後書き）

次の更新も遅くなるかもしれません

Episode：7　Favorite　Flavor？（前書き）

今回は書き方を変えてみました

Ｅｐｉｓｏｄｅ：７　Ｆａｖｏｒｉｔｅ　Ｆｌａｖｏｒ？

二時間目　世界史
本作の主人公九頭木龍之介はとある問題に直面していたそれは…
（問題が全然分からん！！）
何度も何度も問題用紙を読み返し挙げ句の果てには穴が空くのではないかというぐらい見つめても　彼に解ける問題は一つもない…

こんなＥｐｉｓｏｄｅ：５から無様な活躍しかしていない彼は九頭木ではなくクズ木になりかねん！
「誰がクズ木じぁあ！！」
「そこ！廊下にたってなさい！！」
彼は大声を上げてしまい教師から退室を言われた
（（何やってんだアイツ…））（あのマヌケぇ！！）
（何いってんだろ龍ちゃん…）
（あーあやっちゃった）
（何か面白いこと何か面白いことぉ！！）
と教室から出る時背中に仲間たちの視線が刺さるのを彼は感じた

「ハァ～何で俺はこんな目にあってんだよ…」

と一人文句を垂れていると向こうから誰かくるのが彼の視界に入った
（あれは確か…）
「おい…お前確か…副生徒会長の……えっと…あっ！直江ｄ「いえ直井です」
と間髪入れずつっこまれてしまった

「お前こんな所で何やってんだ？テストはどうしたよ？」（コイツＮＰＣのクセに他とは違う行動してらぁ　何でだ？）
彼の言うＮＰＣとはノンプレイヤーキャラクターの略でこの世界に元々おり　クズ木たち死んだ人間に模範的な行動をさせるためのいわば形だけの人間だ
彼直井もその一人だ

「あっそれはあの…テストを受けてたら急にお腹が痛くなりまして今トイレに行ってきた所です」

「あぁ！そうか（あぁいたいた　テストの時腹下してトイレ行く奴…てかこんなあるあるも模範的行動かい！！）すまなかったな呼び止めて」
「では失礼します」
と直井はクズ木に一礼して自分の教室に戻っていく

（ふっ愚民どもが…まぁせいぜい僕のために頑張ってくれ…その後はこの僕が……）と直井は不気味な笑みを浮かべた
彼は何者なのかそして何を企んでいるのか…

キーンコーンカーンコーン
（おっ終わったか）
と彼がしみじみ思っていると
「先生っ！」
と高松の声が聞こえた
天使の気をひく何かが行われるのだ
クズ木はドキドキしながら待っていたすると
「実は自分着痩せをするタイプなんです！！！」

（何のことかわからねぇーどうなってんだ）
彼がこっそりのぞくと上半身裸の高松が天井に叩きつけられた所だった
一つ言えるのは高松の体はムダの無い鍛え上げられた体だった

「たくっ…そんなんでよく行けると思ったわね…」
「自信はあったのですが…意外と言うか何というか…」
「まあ服着ろよ…」
と日向

「あっ龍ちゃん！！やっと戻ってきた」
と姫歌が喜びながら見ている先に教師の説教から解放されアンニュイ感じで戻ってきたクズ木がいた

「あんたねぇ何追い出されてんのよ！！危うく作戦失敗するかと思って肝冷やしたわよ！！」
「落ち着けゆり　怒る気持ちも分かるが今は冷静になれ」
と今にも暴れ出しそうなゆりを必死に音無が止めた
「すまんな…じゃあ次俺が気をひく役するわ」
「フン！まぁそこまで言うなら許してあげるわ　まぁ次はちゃんと気を引きなさいよ　こっちだって推進エンジンを使うのは心が痛むんだから」
（（（（（（（（ウソつけッ！！））））））））
みんなゆりの心にも無い言葉を胸の中でつっこんだ

「任しとけって　俺もただ突っ立ていただけじゃないんだからな！
　最高のネタは考えてるって」
と彼は豪語しているがこのあと見事にスベり見せるに耐えない醜態を晒すことになるのでカットしよう

「だからなんだ！その俺の扱い！！！」

（（（（（（（（こいつもうだめだな…））））））））

Episode：7　Favorite　Flavor？（後書き）

感想待っています

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0946m/

AngelBeats!=Another=

2011年10月7日10時37分発行